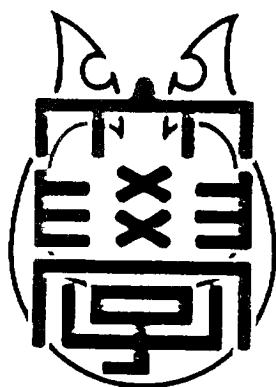


谷口研究室

59年度年間活動報告書

Vol.2



甲南大学文学部

(目次)

I.	巻頭言	谷口 文章	-1-
II.	第八回ゼミナール合宿 (春季) 日程		-3-
III.	第八回ゼミナール合宿 報告		
	“母は枯葉剤を浴びた”を読んで	脇田 博代	-4-
	戦争による自然破壊	黒川 禎三	-6-
	“母は枯葉剤を浴びた”より	村上 隆	-7-
	人が守るべきもの	植木 通博	-9-
	ゼミ旅行の感想	岡保 利佳子	-10-
	ゼミ旅行に参加して	岡田 直樹	-11-
	ゼミ旅行雑感	後藤 雅晴	-12-
	「エミール」について	菅原 宏樹	-14-
	子供は小さな超能力者	杉林 稔	-16-
	“夜と霧”について	佐保田 圭吾	-19-
IV.	第九回ゼミナール研修旅行 (夏季) 日程		-22-
V.	第九回ゼミナール研修旅行 報告		
	ゼミ旅行雑感	脇田 博代	-24-
	福岡さんにお会いして考えたこと	小竹 代里子	-25-
	自然農法	井上 友雄	-27-
	福岡さんにお会いして……	村松 伊津子	-28-
	自然農場について思うこと	杉林 稔	-30-
	ゼミ旅行に参加して	川上 義雄	-31-
	自然農法から学び得たもの	小泉 さより	-32-
	農法以前	前田 幸俊	-34-
	農業と人間について	佐保田 圭吾	-35-
	ゼミ合宿後日談	大野 幸彦	-36-
	文明と思想——自然農法を通じて	津本 学	-38-
	ゼミ旅行運営後記	高井 賢一	-39-

VI.	卒業論文・ゼミナール論文 要旨		
	「純粹経験」の概念について		
	——西田 幾多郎「善の研究」を中心に——		
		池上 与志人	-41-
	理性と感情について		
	——ルソー「エミール」をめぐって——		
		川崎 幸千代	-44-
	環境問題と経済学		
	——学際的研究への模索——		
		大野 幸彦	-48-
VII.	昭和五十九年度 谷口研究室 活動報告		-51-
VIII.	編集後記		-53-

巻頭言

甲南大学 文学部 哲学 谷口 文章

昭和五十九年度の研究室活動を報告します。ゼミ生を中心とする学生層に少し変化が生じてきた一年でした。従来文学部、経済学部中心の構成から、文・経に加えて理学部の学生が増えてきました。

また一回生から指導にあたった諸君がもう卒業の年となり、それなりの成長を遂げ喜ばしく思う一方、他方で寂しい気持ちもしないわけではありません。きっとゼミの雰囲気も変化するでしょうが、後輩諸君には彼らが築いたアカデミックな環境を一層推し進めていってもらいたいものです。そして本学の学生だけでなく、他大学の学生やO.B.達がゼミ合宿等に熱心に参加してくれ研究室活動へ多大な刺激を与えてくれました。

さて昭和五十九年三月の春合宿では、恒例の研究発表会が開催された。哲学系は、ゼミの成果としてルソー「エミール」をテーマとし、また心理学系は、人間の極限状態を分析するためにフランクルの「夜と霧」を採り上げた。そして教養系は前回における淡路島モンキーセンターの「奇形猿」問題の延長線上に中村梧郎の「母は枯葉剤を浴びた」および犬養道子の「人間の大地」を研究文献とした。補説資料として初めての試みではあったが、VTRを採用して、哲学系におけるエミールの教育論については「赤ちゃん・胎内からの出発」「やる気の全人教育」を、心理学系については人間の個人的極限心理を分析するために「家庭内暴力 — 父親の証言 —」を、そして教養系については継続的に追求してきた環境汚染・破壊問題の、生じうるであろう帰結として「ベトナムの二重体児」「エチオピアの難民」を見た上で議論をした。VTRを使用したことは、今までの理論的側面を補足的に視覚から訴える効果があったように思える。学生諸君もこれには衝撃を受け、さらに問題意識を深めたようであった。

そして八月の夏の合宿では、春のその結果を実践化させて、昨年同様に研修旅行に出かけた。自然農法家の福岡正信氏を訪問し、当地で評論家の草柳大蔵氏および松山市民会議の人々と討論会を持ったのである。福岡氏は、不耕起、無肥料、無農薬、無除草という四大原則に従い、四十余年にわたって自然農法を実践されてきたのであるが、その行動原理は、いわゆる氏の「無の哲学」に裏づけられたものであった。また草柳氏は最新の水気耕栽培やミラクル・ライス、そして日本

文化の核である「もののあわれ」という心情などについて述べられ、啓発されることの多い内容のお話をされた。市民会議の人々による農業の実地体験の話や、自然農園に見る生命力あふれる稲、野菜、果樹園に直接接触れることにより、わたしたちの都会生活の不自然さを再認識させられたのであった。都会の騒々しさの中に学ぶ学生諸君にとって、電気も水道もない、いわば自然状態の山小屋生活は一服の清涼剤になったことであろう。

この報告書は今までのものとは違って、ゼミ合宿の報告書であるだけでなく、研究室の全活動報告を総括して編集したものになっています。内容的にも卒業論文、ゼミナール論文を初めとして諸レポートも高度なものとなったと評価できると思います。

報告書作成にあたって、団結した力を発揮した学生諸君、O.B. の人たちに感謝します。

(昭和六十年三月記)

第8回ゼミナール旅行研究発表会のお知らせ

1984年1月31日 甲南大学 谷口研究室

歳冬の折、皆様御健勝のことと存じます。今年も一年間の努力の成果を発表する、恒例のゼミ旅行の日程が下記の通り決まりましたのでお知らせします。低って御参加下さい。

-----記-----

目的： 研究発表会

及び討論会（今回はVTR使用）

日時： 3月23日（金）～25日（日）

2泊3日

宿泊地： 関西地区大学セミナーハウス

（右図）

神戸市北区道場町生野字ロクゴ

318-2

☎07956-4-4391

集合場所： 国鉄宝塚駅 改札口

午後1時集合。

費用： 12,000円

5,000円を前金として、

お送り下さい。

携帯品： 寝具、洗面具、その他。

研究文献： 哲学系：ルソー「エミール（第一編）」（岩波文庫上巻）

心理学系：フランクフル「夜と霧」（みすず書房）

教養系：犬養道子「人間の大地」（中央公論）

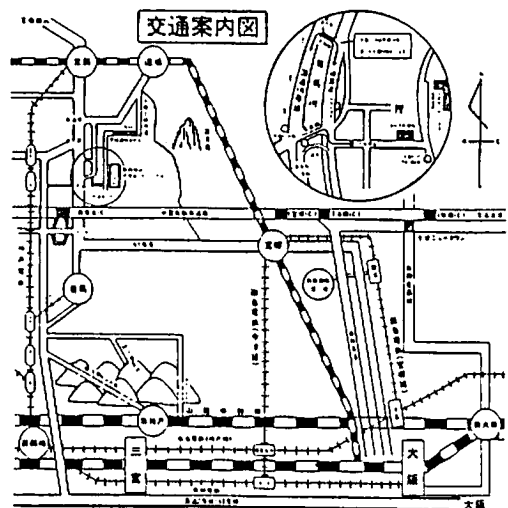
あるいは、中村梧郎「母は枯葉剤を浴びた」（新潮文庫）

申し込み、問い合わせ先：高井賢一 ☎（078）577-3356

〒652 神戸市兵庫区駅前通2丁目1-29-236

問い合わせのみ：谷口文彦 先生 ☎07712-3-9464

締め切り：3月4日（日）必着



教養系——text：中村 梧郎 「母は枯葉剤を浴びた」
犬養 道子 「人間の大地」

“母は枯葉剤を浴びた”を読んで

甲南大学 理学部 一回生 脇田 博代

ベトナム戦争とは、人類がかって経験したことの無い未曾有の化学戦争（化学兵器を使った戦争）という解釈をすることが出来る。本書で、アメリカは初め、枯葉作戦は第二次世界大戦中に日本に対して行われるはずのものだったということを初めて知った。その箇所を読んだ時、私は激しい戦りつを覚えた。正直なところ、一瞬の間、思考が空白になったような気がした。そして、本のすべての写真のページをもう一度、ゆっくりと初めからめくっていった。もしこの枯葉作戦が最初の計画通り、ベトナムではなく日本に対して行われていたら……。のほほんと暮らしている今の私は存在しなかったのかもしれない。そう思うと、私の心の奥底に、かすかな、かすかな安堵感がふっと流れた。そして、その感情に気づき、とても悲しく、恐ろしく、それを心の中からかき消そうとした。しかし、アメリカは広島、長崎に「ゲンバクによって日本にトドメをさす。」ことを選択した。広島、長崎に落とされた原子ばく弾は、今もその子孫に黒い影を残す。しかし、もう二度とあってはならない誤ちを再び、ベトナムで繰り返した。今度は化学物質によってである。ヒロシマ・ナガサキを知る国際世論が生まれ、核は使いづらい。ならば化学兵器を使おう。戦争に勝つためには手段を選ばなかった。世の中の価値は“戦争に勝つこと”であり科学者たちは、より優れた破壊力のある兵器を開発していった。彼らは彼らの新しい化学兵器、枯葉剤・エイジェント・オレンジのすばらしい破壊力を知っていた。そしてその散布によって、あらゆるものの生命が絶滅することも熟知していた。むしろ彼らは敵を、完全に絶滅させることを目的としていたのである。「ダイオキシンは遺伝障害をひきおこす恐れがある。」という報告と、時を合わせるように作戦は一気にエスカレートし、大量反復散布へと大転換した。アジアの人間は、まさに除草されるが如く、猛毒のシャワーを頭から浴びせられた。またベトナムの地上にいたアメリカ兵たちは味方でありながらも枯葉剤を浴びた。上から降り注ぐ猛毒の雨は、降り落ちる地を選ばないからだ。自国のために必死に戦っていた兵士たちは味方の国に簡単に裏切られてしまった。彼らはいったい何だったのであろうか。末端の兵士たちは消費されれば生産されるただのロボットにすぎないのではないか。容易にし

かも安価に敵を絶滅させるためには、末端の味方は犠牲にしましても仕方がない。これでは末端の彼らはあまりにも哀れでみじめであろう。それとも戦争とはこういうものだろうか。幾種類もの毒ガスに毒薬が漂うベトナムの地は、まさに地獄であったろう。人々は地獄の中を死と直面しながらもしぶとく生きようとしました。「戦争で人が死ぬのは悲しい。でも、生き残って奇形児を産むのはもっと悲しい。」——枯葉剤を浴びたベトナムの母親とその子供たち。帰還したアメリカ兵たち。彼らにとって戦争はまだ続いているのである。

枯葉剤を浴びた母親たちは、次々に異常出産を繰り返した。癒合二重体児、唇裂症、単眼症など重度の先天障害を持って生まれた子供たちは、生きる力もなく皆、生まれてすぐに死んでいった。あるいは助産婦が子供をとりあげるとすぐに始末をしてしまったりするケースもあった。私達はそういう子供たちを見て、かわいそうだとか憤りで済ませてしまうこともできよう。また目を背けたければ背けることもできる。しかし彼らの後ろには母親がいる。母親は彼らの問題を放棄することはできない。それどころか、自分自身の問題以上として悩み、また強くならなければならないのだ。

神様の犯した、ただ一つの失敗は“人間”というものをお造りになられたことである、という言葉が頭に浮かんだ。草を食べるシカはライオンに食べられ、死んだライオンは草に養分をもたらず。すばらしい自然淘汰の法則は、人間の手で崩されていく。こっけいなことに人間は動・植物、環境を次々に破壊していきながら、それらが滅び去ろうとする寸前に“天然記念物”として指定する。人間は他の動物にないすばらしい能力を持っている。そのことは科学の進歩にも見られることができよう。しかし科学は、一部、暴利を貪るように非情な用いられ方をしてしまった。戦争が終って世の中は皆、豊かになろうと努力してきた。世の中の価値観は変化した。が、手段は未だ変わっていない。例をあげると、ベトナム戦争に用いられた枯葉剤エイジェント・オレンジに含まれていた猛毒“ダイオキシン”は現在、日常の殺虫剤、除草剤として市場に出回っているのだ。これでは私達は、あのベトナム戦争で、枯葉剤を散布するよう命じられたアメリカ兵たちと同じである。一つ違っているのは、彼らは「枯葉剤は無毒である。」と信じていた。しかし我々は「有毒である。」ということを知っている点である。私達は、今、ベトナム戦争で起した大きな誤ちを再び、じりじりとゆっくり繰り返しているような気がする。

昨年夏、淡路島モンキーセンターへ行って奇形ザルを見学してきた。私はサル社会を見て、猿たちは奇形ザルを“奇形”という観念を持たず、暖かく受け入れていたように思えた。その点は人間社会も見習うべきであろう。しかし人間社会においては、有害な化学物質の汚染が原因で、心ならずも障害を持つこと

があるならば、それは社会問題として解決されなければならない。 国を富ませるためには先天障害は仕方がない、といった困ったことにならないためにも・・・

戦争による自然破壊

甲南大学 経済学部 二回生 黒川 禎三

今回のゼミ合宿では、「枯葉剤」・「途上国」に住む人々の生活状況などについて話合ってきたが、私は「枯葉剤」について取り上げることにする。

長期化したベトナム戦争の間には数多くの悲劇があったが、中でも「枯葉作戦」は最初に挙げられるのではなからうか。特に注目されるのは、枯葉剤をあびた人が、子供を産んだりすると障害をもった子供の発生率が非常に高いことである。このことは、その戦争の傷跡がいつまでも続いていくという非常に不幸な結果になるということを意味する。

一人間として考えてみると、これは神に対する冒とくであり、政治というものは事の善悪の区別さえもわからなくさえてしまうという点が恐ろしい。まず、政治を司どる人は政治にかかわる前に一個人としての人間性というものを絶対に捨ててはいけないと思った。

簡単に化学兵器を使用することができるようになった今日、政府の人々は人道的に戦争というものは行なう事ができないということをよく知っているはずである。また、彼らはその兵器の使用は地球そのものの運命をも変えてしまう恐ろしい力を秘めていることを知らなければならないし、また、その使用を極力さげなければならないのではないだろうか。

人種、宗教、イデオロギーの違いにより、有史以前から、人間同志は争いを続けてきた。僕は何も、戦争は必ずなくなるというような楽観的な考えを持っているわけではない。しかし、戦争というものは、極力避けなければならない。何故なら、この地上では、イデオロギーにまったく関係のない人々が大部分を占めているからである。彼等に何の罪があるのだろうか。彼等が何をしたのであろうか。そのような人々を戦争に巻き込まないように我々、次の世代を担うものは、力を尽すべきである。

枯葉作戦による被害は、ベトナムだけでなく、アメリカにも及んでいる。つまりこのような戦争は結局、勝利も敗北もないものなのだ。遺伝子に決定的な打撃を与えるこの兵器は、戦争当事国両国の次の世代の子供達の体をむしばみ、彼らを死に追いやりようとしている。それを知っていて政府関係者が許可したのであればこれは絶対に許せないことではないか。

今、世界は大変な変革を迫られているといっても過言ではないだろう。高い経済成長に伴う自然破壊、常につきまとう戦争の可能性等々。私は、それを完全になくせるとは決して夢にも思っていないが、その状態を少しでもやわらげることにはできると思っている。そのために与えられたのが人間の英知ではなからうか。人間には、兵器というものを作り出した優秀な科学力がある。なのにその兵器の使用を抑える力が我々にないということはないだろうと思う。

最後に私が最も声を大にして言いたいことは、このような事件に対する報道の姿勢である。ベトナム戦争での「枯葉作戦」ばかり批判しても片手おちである。現にアフガニスタンでも、化学兵器の使用が報告されているのに、何故マスコミは、報道しないのか。米国の化学兵器が悪で、ソビエトの兵器が善ということは決してありえない。そのような偏向極まりない姿勢で報道されると、報道されない方でますますこの種の兵器が使用されることになろう。もっと悪くすれば、一方的に相手がこちらを非難する、プロパガンダの方法に利用される恐れが多いし、現にそうなっているのである。東も西も関係なく、世界に今の状況を伝えることによって、一人間としての「幸福」とは一体何かについて、西側の人々も、東側の人々もお互いに理解しあえるのではないだろうか。その交流と理解は、国境を越えうる強いものになりうるのではないだろうか。

“母は枯葉剤を浴びた”より

奈良高専 OB 村上 隆

私たちは「母は枯葉剤をあびた」と、ダイオキシンをめぐる様々なVTRを基に討論会を行ないました。

私たちにとって何よりショックだったのは、ベトナムにおいてダイオキシンの毒性により、今現在も多数の身障者が生まれ続け、そしてさらに、それ以外の何か不明の原因によって、近年非常に障害児の出生率が増えだしたという事実です。こうなってくると、もはやダイオキシンだから危険で、違ってから危険でないなどは絶対に言えません。“科学”という名の両刀の剣の良い方だけを追い求めてきた私たちに対する報いが現在の状況であると、私は考えます。

そしてもっと恐ろしいのは心の荒廃です。人間がこの荒れ始めた世界を修復し、人間としての歴史をこれからも守り続ける為には、人間として正しい心を持つことが第一であると、私は考えるのです。

さてそれでは“人間らしい心”とは何なのでしょう。討論の直接の争点はそ

のことではありませんでしたが、私が最終的に求めたかった結論は、そのことだったのです。私のこの討論における興味を中心は、「もしあなたの子供が身障者であれば、あなたはどう思いますか？」

様々な意見が対立し、多くの議論がなされました。しかしその一つ一つをここで紹介する必要はないでしょう。私はまず、これを読んで下さっている皆さんに、この事について考えていただきたいのです。果して、自分の子供が身障者として生まれたとき、その子をこれから育てていくことに一瞬でもためらいを感じない人が何人いることでしょうか。子供は親の宝と言います。しかしいかなる状況においても、子供は親の宝であることができるのでしょうか。

身障者の子供を愛をもって育てぬいた親が立派であることは言うまでもありません。しかし、そうして育て上げた子供が社会から受けるあつかいを考えたとき、そしてそれを考える親の気持を考えたとき、私は育てることに疲れてしまった親を責めることはできないのです。

この論議を進めるにつれて、もう一つの興味が生じてきました。それは「あなたは“中絶”というものをどのように考えますか？」ということでした。

親としての義務・責任を追求することは一見たやすいことのようにです。しかし、愛のない行為により宿った命ならばどうでしょうか。その命を育てることが親にとって耐えられないことであるとしたらどうでしょうか。

しかしまた一方、胎児の事も考えてみて下さい。今回見たVTRの中でも“胎内からの出発”は、特に私が感動を覚えたものですが、そこでは一つの生命としての赤ちゃんの素晴らしさと、一人の人間としての赤ちゃんの尊さが描かれていました。ここで私は胎児と言えども立派に一人の人間であることに確信を持ちました。いやそれよりもまず、私たちは生命そのものの神秘に驚嘆すべきでしょう。

私たちはこの二つの立場から見た論理を互いにぶつけあいました。そして討論をくり返せばくり返す程、さびしい気持ちにかられるのです。身障者として生まれて来た子供を憂える心、五体満足に生まれてくる（であろう）子供を期待する心、実にいやらしい想像です。しかし、この討論の中でこんな意味の言葉が出て来ました。「人間というものは、きれいな事だけで生きてゆける程強くはない。私たちはそんな人間の弱さや悲しさも認めなければならないのではないだろうか。」

これが最終的な私たちの討論の結果です。つまり、白か黒かをはっきりせず、に灰色を認めたところで私たちの討論は終わったのです。結果的にみて、何も具体的な結論は出なかったように思えます。しかし私たちは、この討論で得た結果は、人間の力ではどうにもならない事、避けようのない現実、そして如何なる論理も適用することのできない「聖なる領域」の存在を再認識させるものであったと考えています。

そしてもう一つ、この討論の中では随所で法律的なある一定条件について述べた意見が見られました。それは、「法律は人が守るべき最低限のモラルである。」と考えられていることによるものですが、私は今回の討論によって、モラルに最低限の境界線を引くことは、不可能であると感じたのです。

人が守るべきもの

甲南大学 理学部 二回生 植木 通博

科学技術の質的・量的な急速な発展は、これまで、神聖視されてきた「生命の営み」に対して、直接的な影響を及ぼすようになった。私たちは、このような事態に対していかに対処していかなければならないのでしょうか？——ここではダイオキシンによる障害児の発生を例に、考えを進めていきたいと思えます。

ダイオキシンとは、塩素を含んだ有機化合物で、化学的には、P・C・B（ポリ塩化ビフェニール）と近い関係にあるものです。このダイオキシンは、発ガン性や催奇性（奇形を生じさせる要因）が非常に強いことがわかってきました。このことは、ダイオキシンが、生物の遺伝子に対して重大な悪影響を与えることを意味します。

アメリカ軍がベトナム戦争の時の枯葉作戦に使用した枯葉剤には、このダイオキシンが混入していました。大量の枯葉剤を浴びたベトナム人の子供に、高い割合で、障害を持つ子供が、今も生まれ続けています。四肢異常、水頭症、二重胎児、これらの子供たちには、当然何の責任もありません。生まれながらにして、このようなハンディキャップを持つ彼等を通して、単なる戦争の悲惨さ以上に、化学物質の持つ——ひいては現代科学の持つ危険な面を見せられたように思います。

ダイオキシンのような、科学が生み出してしまった厄介な物質は、何とか無害化したり、分離選別して自然界に出さないようにするとともに、これらの不幸な子供たちが、社会の中で十分に生活していけるように、私たちは努めていかなければならないと思えます。

しかし、一度傷ついてしまった遺伝子は、修復することは、出来ません。傷ついた遺伝子を持った者の子孫は、その遺伝子を受け継いでいき、そのようにして傷ついた遺伝子は人類全体へ拡散していくでしょう。一般に、生物は両親に由来する一对の遺伝子を持つため、遺伝子の傷がすぐには形となって現われることは少ないでしょうが、人類全体を大きく見る時、遺伝子の傷による影響がじりじり高まっていくことは避けられないでしょう。

この問題に対処するために、優生学の立場をとる人々は、劣悪な遺伝子は、人類にとってマイナスであるから、人類の遺伝子から排除すべきであると主張しています。同様な考えで、優秀といわれる人の精子をストックして販売する精子銀行といわれるものも運営されています。

この人々の考え方には、問題があります。彼らは、核酸という化学物質にすぎない遺伝子を基準に、しかも「正常」「異常」「有効」といった、身勝手な価値観で人を判断しています。果たして人の価値をこの様な基準で判断できるのでしょうか。

遺伝子の優秀さと人の価値とは、違う次元の問題であると思います。人には一人一人、人格というものがあり、このことが、他の生物と人とを区別している点だと思います。だから、どのような劣悪な遺伝子を持ち、障害があろうとも、一人の人間として十分に生きる権利があるはずです。

現在、化学物質等によって遺伝子が、徐々に傷つけられているということも、事実でしょう。私たちは、遺伝子に作用する要因を極力排除していかねばなりません。そして、生命を物質的なものとしてでなく、尊厳ある人格として守るべきであることをよく認識し直すべきだと思います。

ゼミ旅行の感想

甲南大学 理学部 一回生 岡保 利佳子

私は、今回初めて、ゼミ合宿に参加しました。他の参加者の方々の発表や、その時の雰囲気、谷口先生、その他の聞いている方々の質問時の様子など、春休み期間中ではこの合宿中が私にとって一番色々な体験をした時であったと思います。そのうちの一部のことについてですが、これから感想などをここに書きたいと思います。

現在、私達が普段スーパーなどで買う卵は、大きな養鶏場の狭いおりの中で産まれたものですが、谷口先生がこの時、御自宅のチャボの卵を持って来て下さいました。産みたてのものです。先生は授業中に何度かこのことについて説明して下さっていましたが、今回、実際に目で見て味わうことができました。殻は厚くてしっかりしており、“きみ”にも“しろみ”にもしまりがあり、味は本当にコクがありました。

「昔の卵は、もっとおいしかった。味にコクがあったよ。」というような言葉を何度か耳にしてきましたが、今の卵も昔の卵も相変らずニワトリが産んだ卵であることから、今の卵は多少味はおちているかもしれないけれど、それは昔の卵

の貴重さや、「昔はよかった」という感覚から出ているものだと思っていましたが、この合宿に参加して私の考えは少し変わりました。

次に討論会についてですが、最初は少しとまどいました。それから、発言が少なかったことを反省しています。グループの方から、「女性としてどう思いますか。」と問われた時、私は自分が“女であるから”という考えが全く欠落しているとまではいかないまでも、“他の人よりは抜けてしまっているなあ”と強く感じました。これが良いことかどうかわかりませんが、自分としては、それでも別に悪いことではないと思います。このことについては皆さんに御意見を伺うこともあるかも知れませんが。

また、この合宿に参加することによって、理学部の限られた人達以外の方とも知り合いになれて良かったと思います。今考えてみると、研究発表・討論会と同じくらい、このことは印象に残っています。皆さん、どうもありがとうございました。

ゼミ旅行に参加して

甲南大学 経済学部 一回生 岡田 直樹

今回のゼミ旅行では、どういう事をするのだろうという好奇心から参加しました。

討論は想像していた以上に激しいもので、哲学や心理学に何の知識もない上に参加前は、ただ話を聞いていればよいと思っていたため、人の話を理解することの難しさを痛感しました。

そんな私でも、一般教養として取りあげられた「南北問題」や「ダイオキシン等の劇薬に冒されている地球の問題」では、手足がやせ細り、おなかや張り裂けそうに膨れあがっている子供達の姿に驚いたり、私達の体が、そして地球が、人間の生み出した毒物によってじわじわとむしばまれている事実、果てしない恐怖と怒り覚えたりしました。また、そのことがわかっていながら、どうすることも出来ない自分の無力さにもどかしさを感じたのです。

しかし、それでも、そういう事実があるということを知ったことは大きな収穫であったと考えます。それらの問題は全て私達自身のものであり、これらの事実に対して目を閉じていれば今は苦痛を感じなくとも、いずれは必ず私達を滅ぼすであろうからです。そしてそれらに対して常に真正面から向かい合わねばならないという自覚を促すことが出来たことは、不幸中の幸いであったと思えるのです。今、地球は未曾有の危機にさらされています。しかし、それらはちまたで盛ん

に言われている「ノストラダムスの大予言」とかいったような、私達とかけはなれた所からもたらされるものではなく、まちがいなく、私達自身が作り出しているものなのです。だから、私達は、これから過ちを犯さないように努力していかなければならないし、また、犯した過ちの償いに全力をつくさなければならないのです。そして、そうすることに私達の意識の進歩があると思えるのです。

私にとって初めてのこの旅行は、私に多くのものを与えてくれました。自分の考え方が付け焼刃以外のなにものでもなかったということを知り、理解力のなさを知ることはつらかったけれど、長い目で見れば良い結果をもたらしてくれると思います。

この旅行に参加して良かったと思うと同時に、次からも積極的に参加したいと思っています。

ゼミ旅行雑感

奈良高専 OB 後藤 雅晴

「何か判然としない。何か欠けているような気がする。」それが、現在の心境である。何かたいせつな一点が欠けているのだ。

今回のゼミ旅行は特に子供についての議論が多かった。それらの多くの意見は確かに、「生命の尊厳」についてふれるのだが、僕個人として、それらの多くの意見が述べられている「生命」に何かしら厚みというか実感的な重さが乏しいような印象をうけたのだ。

「人間の生命は尊い。尊いが故に、不幸な状況に生まれた生命は一人立ちできるまでに、我々大人が生命を絶つ方が良いのではないか。」こういった論旨の意見がいかにか多かったか。確かにこの意見にも一理はあるかも知れない。しかし、私達は今回のゼミ旅行を通じて、胎児がすでに一人の人間として成長しているという事実を知ったのではなかったか。胎児はすでに喜び悲しむことのできる人格を持っていたのではなかったか。

別な点から見よう。僕の目の前に一人の両親のいない子がいるとしよう。僕は彼の生い立ちの全てを聞き、なおかつそのなやみをなんとかして解消なりあるいは軽減をしてやろうと真に考えている。しかし、僕には実際のところ本当に何も良い方策はみつけれはしないのではないか。人間の命はそれほど軽々しくはないのだ。生を受けた子供に生誕を与えるかいなかは、果して親たちの手に任せられているのだろうか。しかし、きっと生命自体を自らの都合で左右できる程の権利までを持ってはいないはずだ。

彼らの意見の多くは、「生命の尊さ」を一方で認めておきながら、不幸な環境に「生まれる」ことを拒んでいる。この二つは互いに相容れず、結局議論自体がジレンマに陥ることになる。我々が真に議論すべきことはそこにあるだろうか？

暴行により心ならずも身ごもったという事実、生まれても餓死するより他に途がないという事実、貧困のため子供を養えないという事実……。そうした事実のあること自体が、そもそも許されないことではあるまいか？

生まれて来る子供達には、自分の生まれる環境を選ぶ能力は今のところ見出し出せない。私達はさんざん子供達に不幸をもたらす環境をつくっておきながら、いざ我が身にふりかかってきた時にあわててその場を都合良くとりつくろっているのではないか。その点においては、生を授けることもその逆も同じなのだ。産むか産まないかだけを論じるのは自分達のふるまいに目をつぶった皮相的な議論であるし、それは一つの逃避ですらある。例えば中絶の賛否を問うことは、何ら建設的な方向を含んでいない。我々の目指すべきは、子供達が人間らしく自然に生まれ育つ環境をつくることではないか？

「生まれてきていいですか？」などと、我々に尋ねてくる子供はいないのだ。

「エミール」について

甲南大学 経済学部 二回生 菅原 宏樹

序

果して「エミール」は、教育の方法論について書かれたものなのだろうか？ およそ70頁にもわたりながらもこの「エミール」第一編には一つも章句がなく体系化されていない。また、細かい教育についての事柄が方法論的に述べられていることが多く、つかみどころがない。ゆえに、この「エミール」を単なる教育の方法論としてとらえるに終わったとき、それはとりとめのない方法論の羅列に陥ってしまいかねないと思うのである。

そこで私はこの「エミール」の中に、彼の教育論の基礎にある哲学思想を把握し、くみとることによってルソー流の教育哲学の書として、この書を理解し次に述べて行こうと思うのである。

1

「生まれたときにわたしたちがもってなかったもので、大人になって必要となるものは全て教育によってあたえられる。」(P.24) ルソーは自然主義でありながらも、教育において放任主義ではないことをこの文の中で明らかにしている。つまり人間は生まれたときは弱くたとえ力強く生まれたとしてもその使い方を知らず分別も持たない。だから子供には教育が必要なのである。そしてその教育とは押しつけ、つめ込むことではない。それは冒頭でルソーが言うように「万物をつくるものの手をはなれるとき全てはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる。」(P.23) からである。教育とは「教えることよりも導くこと」であり「教訓をあたえるべきでなく、それを見出させること。」なのである。

自然を尊ぶルソーは、我々の生まれながらにして持つ感官を習性や憶見によってゆがめられることを否定し、故に「あなたの子どもの魂のまわりにはやく垣根をめぐらしなさい。」(P.24) という。これは放任主義的教育とは言えない。むしろこれをルソー的自然主義教育と言うべきであろう。

この教育は、自然・事物・人間によって与えられるものである。そしてこの三つの教育が一致していなければ弟子は悪い教育を受けることになる。その中でも「自然の教育」は人間の手ではどうすることもできないものである。

故に、我々は、完全に我々の手にゆだねられた「人間の教育」と、ある点にお

いて我々の自由となる「事物の教育」を「自然の教育」に近づけ一致させなくてはならない。そこでルソーの教育は、「自然の教育」を主にして行なわれることになる。「自然を観察するがいい。そして自然が示してくれる道を行くがいい。」

(P.42) つまり、子供に本当の自由を与えることが必要となる。それは世間の習俗や、憶見といった害、自由を拘束するものから、子供をまもってやるが必要となる。自由を与えられた子供はできるだけのことを自分でし、経験していくことによって、してはならぬこと、しなくてはならぬことを学んでいく。決してそれは大人の言葉による教育であってはならない。大人が強制し、教えつけることによって子供は経験することが少なくなる。「生きること、それは呼吸することではない。活動することだ…もつとも長生きした人とは、もつとも多くの歳月を生きた人ではなく、もつともよく人生を体験した人だ。」(P.33) とルソーは言うのである。

2

ところがルソーの考える教育とは人間を作る教育であり、市民を作る教育では決してない。「社会状態にあつて自然の感情の優越性をもちつつけようとする人は、なにを望んでいいかわからない。絶えず矛盾した気持ちをいだいて、いつも自分の好みと義務とのあいだを動揺して、決して人間にも市民にもなれない。」

(P.28) この相反する市民と人間という二つの目的から、教育の形態も二つ生まれる。その一つは良き市民の作り出す公共教育であり、もう一つは良き人間を作り出す家庭教育である。

この「エミール」とほぼ同時期に書かれたのが「社会契約論」である。この書の中での市民は、他に対して譲渡し、それにより自由と権利を最大限に確保するため相互に契約を交わす。つまりこれが社会契約である。一見、この「社会契約論」と「エミール」両著の間には矛盾があるように思われる。なぜなら一方では人間を作る教育を主張し、他方では、市民を作り出すべき社会状態を主張しているからである。

「もし、人がめざす二重の目的が一つにむすびつけられるなら、人間の矛盾をとりのぞくことによって、その幸福の大きな障害をとりのぞくことになる。」

(P.30) もし、こうなれば「人間であり市民である人」が生まれる。このような類まれな人間を作り上げるためには良き教師が必要なのである。

「社会契約論」と「エミール」は二つで一つの理想の状態を構想している。一方で理想の祖国を、そしてもう一方で理想の人間を。ルソーは、この二つをもって人類の最高の究極点としてめざしたのではないであろうか。

我々はこの二年間に「学問芸術論」、「人間不平等起源論」、「社会契約論」そして、この「エミール」と、ルソーの主要な著書を読んできたことになる。これらを通して共通するルソーの思想というものを私は感じとってきた。それは自然への礼賛である。「学問芸術論」では文明・芸術・学問の中でぜいぜいさや不正に陥った人間を否定し、「人間不平等起源論」の中では社会状態での不平等を訴えている。ルソーは文明や社会を否認し、自然状態における人間の善性を訴えているのである。

ルソーの考える自然人とは、他の人間との相互の関係など考慮することなく自由に生き、そこにおいて自己愛をもってはいたが、社会化された良心はもたない。ところが社会状態になれば人間は理性にしたがわねばならなくなる。教育には、事物の必然と理性によって自然な感情に対して人為を加えるときが必要である。そしてこの人為を通じて人間の自然が回復されると、ルソーは考えるのではないだろうか。

——— 参考文献 ———

- ルソー「社会契約論」、「学問芸術論」、「人間不平等起源論」
(岩波文庫)
- 桑原武夫「ルソー」 (岩波新書)

子供は小さな超能力者

京都府立医科大学 四回生 杉林 稔

生物学的個体として自然界が与える影響と、文化的存在としてまわりの大人の子供観が与える影響と。生まれおちた子供が受けるこれら二つの影響のうち教育がかかわるものは、後者であることはいうまでもない。子供観は時代とともに変化するし、地域によっても異なる。つまり、文化の数だけ子供観があるといってもいい。ルソーの教育論について考える時、ルソーの生きた時代と地域の子供観と、ルソーが持とうとした子供観とを検討しなければならない理由はそこにある。ヨーロッパにおいて子供期という今ではあたりまえの観念が中世にはまったくなかったことは驚くべきことだ。大人に対する意味での“子供”は存在しなかったのである。はじめて、子供期が意識されたのは十三世紀にはいつてのことだった。十五、十六世紀にもっとも顕著になったこの最初の子供観とは、「子供＝単なるかわいがりの対象」という図式であった。このようなかわいがりの態度はモンテ

ーニュによって批判されたが、十八世紀になって「純真無垢な神の被造物として尊ぶ」という方向に推移した。また、同じころそれに加えて「あやふやな理性の発達を促さなければならない対象としての子供」という見方も生まれ、多様化してきた。「あやふやな理性の発達を促す」という姿勢は現在の学校教育の成立基盤の源流をなすものと思われる。ルソーもこの多様化の時代に生きた。

ルソーの子供観とは、つまるところ「子供は文明化された文化から守られるべき存在である。」ということに尽きる。ここから次のような視点を導き出せる。第一に子供に大人以上の価値を与えていること。これは、神の被造物として尊ぶという態度にも通じているが、ルソーにおいては、それは自然の産物として自然人となる可能性を秘めているという意味においてである。第二に大人の配慮（つまりは教育）が必要であるとしていること。これは、放っておけばまわりの文明人の文明的配慮によって、文明化してしまう、つまりそれを退ける配慮をしなければならないという意味である。ルソーの教育論の現代的意義はまさにこの点にあり、現代文明のかかえる様々な病理現象の救済者のイメージを我々は子供から受け取るのである。このようにルソーは、その時代に広まっていた二方向の子供観をうまく取り入れつつ、ルソー独自の自然観に根ざした子供観を提出したといえる。

では「文明化された文化から守られた」子供とはどういう生物か。しかし、人間は文化を離れては人間ではありえない。それが文明化された文化に生きないのなら、文明化されていない文化に生きるのである。文化というからには、単に非文明的で、めったやたらで、アトランダムな漠然としたものではなく、“自然”をその存在の核としているがゆえの自律性・自己充足性を持ったもので、私達の文明化された文化とは違った秩序・体系を持っているという意味で、異文化と呼んでもいいだろう。まただからこそ大人の世界（文明化された文化）と子供の世界（自然を核とした異文化）との接点（教育という場）も見いだしえるのである。

大友克洋のマンガ“童夢”は広く若者に支持された。このマンガが描くのは、超能力を持った少女と老人（ボケていて頭の中は子供同然）との無邪気な抗争によって、現代文明社会を象徴するかのような巨大な高層団地を破壊するという、おそろしく象徴的な物語であった。若者たちは、現実の原則から解き放たれて、様々な超能力を使う二人の子供に酔い、崩壊していく高層団地に、その理由もわからないままなす術を失って、ふためく大人たちを笑った。この物語は、大人文化が団地のコンクリート壁に象徴されるような無味乾燥な制度、制度化された感性にがんじがらめになって、自然を源とする文化の生命力の泉をからしかけることになれば、子供文化がそのような制度にとって破壊性を持つようになることのぐう話のように思われる。

では、大人はそのような子供をどのように扱えばいいか。危険性をはらんだ子供はなるべく早く社会化してしまおうというのでは、ますます中心的文化（大人文化）の形がい化を押しすすめるだけである。子供文化の反文化性が入りこめる余地をつくり、そのエネルギーを取り込むことで、中心的文化に生命力をふき込むことが必要である。そのためには、子供の世界の独自性を尊重し、子供独特のとっぴな発想・行動を味わうことが大切であろう。教育とは、そのような「子供の世界」と「大人の世界」との接触の場であるのだから。

—— 参考文献 ——

- 中村雄二郎 「挑発する子どもたち」 (駿々堂)
H.B. シュワルツマン・他
- ルソー「エミール」 (岩波文庫)

“夜と霧”についての一考察

——現代とのかかわりにおいて——

立命館大学 文学部 一回生 佐保田 圭吾

序論

「夜と霧」における徹底した管理下にある極限状況での人間の心理と、実存分析における人間存在の意義を踏まえつつ現代の管理社会化における人間存在の問題を考察したく思う。

本論

強制収容所における極限状況は収容ショックに始まる。人種問題の最終的処理のために強制収容された囚人たちは、劣悪な条件下での長旅に疲労困ぱいし、収容所のプラットホームに到着するやいなや、最初の死の選別にさらされる。労働に不相当と見なされたものは直ちにガス室へ、適当と見なされたものは最後の全財産を下着まで奪われ、入墨の番号によって人間を区別し、取り扱う収容所のトラックへと向い、今までの全生活と訣別することになる。

収容された人々を襲う初めての精神的危機は自殺願望である。この時期にこれを抑制できない物は、ためらいなく高電圧の通る鉄条網に向かって走っていく。しかし、大多数の正常な人々は、正常であればある程、漠然たる生への期待と将来への可能性を考えて、異常な状況に対しての異常な反応すなわち慣れを獲得していく。

慣れを獲得した人々は、死と苦悩と病が充満する世界に対して無感動、無関心という心の装甲を巡らすことによって心の自己防衛を行い、ただ生存を維持することに集中する段階に至る。生命維持にのみ精神を集中するという心理的な強制状態の下では、精神はある原始的状態にまで低下し、夢すらも、パンや煙草、ふろ、といった素朴で即物的な要求で満たされる。それすらも覚せい時には、現実との恐るべき落差ゆえに極めて有害な影響を与えるものになってしまう。このような恐るべき環境下の、徹底した管理によって単なる“物”としての扱いを受けながらも、元来精神的に高い生活をしてきた人々は、その比較的繊細な感性素質にも拘らず、内的豊かさへの逃走の道をとることが可能であった。またそれ故にしばしば頑丈な身体の人々よりも収容生活をより耐えたというパラドックスが生まれた。

極限状態における内的緊張の持続は、まず未来のある目的に向かって緊張することにある。では、全く拠り所を失い「私はもはや人生から何も期待すべきものはない。」と語る人に如何に答えられようか。

ここで必要なのは生命の意味についての問いの観点の変更である。つまり、われわれが人生の意味を問われたものとして体験するのである。個人によっても時間によっても変化し続ける人生の使命と存在の意味に対して、積極的に創造的活動を求め、そしてある時には体験しつつある価値可能性を実現化することを求め、また時には運命を卒直に自ら担うことを求めるのである。何人も彼の代りに苦悩を苦しみ抜くことはできないのであり、まさにその運命に当たった彼自身がこの苦悩を担うことの中に独自の業績に対するただ一度の可能性が存在するのである。人間の生命は常に、如何なる事情の下でも意味を持ち、そして存在の無限の意味は苦悩と死さえも含むのである。

以上考察を進めてきた“夜と霧”における極限状況での人間の心理と実存分析における人間存在の意義は、現代管理社会下での人間存在の問題に幾つかの心理的な類似と、実存分析的な人間存在の意義について疑問を投げかけているように思える。

心理的な類似とは、一つは労働における疎外の問題である。近代以後の資本主義的利潤追求を目的とする労働は、本質的には強制労働といえよう。労働はある他者に属しており、労働者には外的である。労働者は強制される存在形式の中で、人間の内的自由を失い人間諸機能において動物的存在へと低下させられ、非有機的な身体である自然からも疎外され、ついには類的存在としての人間からも疎外される。これは相対的にはあるが、強制収容所における人間性破壊と同様の無感動、無関心という現代人の一特性をもたらしている。

今一つの類似は、疎外による精神的自由の喪失が、自らの未来に対する創造性を失なわせ、その価値的存在としての拠り所を失なわせるという点である。存在理由の喪失は、漠然たる不安と心のわい小化をもたらし、個人は自らの狭い殻の中を絶対化し、それがまた社会全体の不安定性を増大させ、未来への漠然たる不安はより一層絶対的な未来を疑問視させるという悪循環をもたらすのである。

このような類似は、当然、内的緊張を弛緩させるが、現代の物質文明の中で生きるものにとっては、それは直ちに心身の崩壊を意味するものではなく、無感動・無関心を武器とした心の自己防衛によって現実には惰性としての苦悩なき人生を意味する。それ故に実存分析におけるような人生の意味を問われたものとして体験することは彼が何らかの外的理由によってその小市民的幸福を失うことのない限り、積極的な価値創造を求め、人生の意義を問うことは非常に困難なのである。

結論

あたかも現代社会は、相対的なアウシュビッツと化し、内的緊張の弛緩は人間の苦悩すら奪おうとしつつある。未来に対する漠然たる不安が存在するものの、われわれは、そのいら立ちに対する対象を見し得ないでいる。内的自由の回復と心のわい小化の克服はわれわれの世代の直面する一つの歴史的課題である。

しかし、そのような事態においてさえ価値判断の自由が存し得るという事実の不幸と絶望感を、われわれは運命の苦悩を担うことの一つの可能性として信じることを感性的に捉えることができるように思えるのである。

第9回 セミナール研修旅行

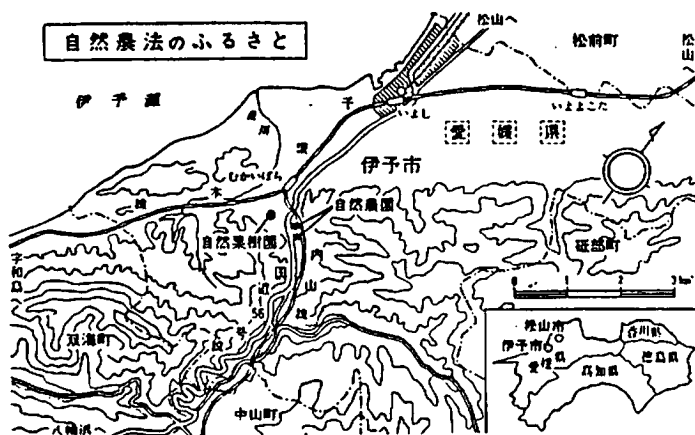
梅雨の頃となりましたが、皆様、お変わりございませんでしょうか。今年もまた、谷口研究室ではセミナール研修旅行を下記の通り計画しております。今回はNHKで紹介された、自然農法家として著名な福岡正信氏を訪問し、自然農法の実地体験や評論家の草柳大蔵氏との対談および松山市民会議との合同討論会が予定されています。私たちはここ数年、自然破壊・環境汚染の問題について研究・討論を重ねてまいりました。昨年度の淡路島モンキーセンター訪問の継続として、皆様の多数の御参加をお待ち申し上げます。

甲南大学文学部 谷口研究室

昭和59年7月3日

記

1. 日時 : 集合 8月3日(金) 午後8時30分 国鉄芦屋駅改札口
解散 8月6日(月) 午後8時10分 国鉄芦屋駅改札口
2. 携帯品 : 着替(トレーニングウェア) 運動靴 常備薬(酔いどめ等)
自炊に必要な食器類 洗面用具 学生証 参加費残金
保険証のコピー
3. 研修先 : 自然農法家 福岡正信氏農園
住所・愛媛県伊予市大平甲201-2
☎ 08998-3-2617



- 4, 参考文献： 福岡正信著「自然農法」(時事通信社)
同著「わら一本の革命」(柏樹社)
草柳大蔵著「美しいものとの出会い」(大和書房)

5, スケジュール

8月4日(土)、5日(日)にわたり自然農法の実地体験、草柳大蔵氏との対談および松山市民会議との合同討論会など
宿泊形態：山小屋ないしはキャンプ生活
自炊(ふもとに小屋、キャンプあり)

6, 申し込み方法

参加費は二万円です。うち一万円を前金として下記へ7月20日までに申し込み書といっしょにお送り下さい。

〒652 神戸市兵庫区駅前通2丁目ノ-29-236

高井 賢一

7, 問い合わせ

ゼミ旅行幹事

高井賢一 ☎078-577-3356

脇田博代 ☎0722-97-1064

谷口文章先生 ☎07712-3-9464

宿泊先 左記福岡氏宅

----- (きりとり) -----

申し込み用紙

第9回ゼミナール研修旅行に、前金一万円を添えて申し込みます。

氏名

住所

電話

大学名・勤務先

近況

ゼミ旅行雑感

甲南大学 理学部 二回生 脇田 博代

耕さない。肥料もやらない。農薬もやらない。何もしない。種をまいたら後はほったらかしの放任農法。誰にでも楽に出来る農業形態。それから非科学的で・・・。“自然農法”という話題に初めて触れた時、私は以上の様に受けとめていた。しかしそうではなかった。特に、放ったらかしの放任農法とは、誰にでも出来る楽な農業形態とは、とんでもない想像であった。クローバーを混植させるのも、不耕起にして雑草の種類を単純化させるのもある意味において“科学的”である。その日その日の天気も一日ずれるだけで作物を成功と失敗とに大きく二分してしまう。それは失敗と経験との繰り返しで、一朝一夕で誰でもやれるのではなかった。「たぶん私の間違いだらけの自然農法に対する理解を少しでも訂正することが出来るであろうか。」又、「自然農法の真髄を少しでも感じるだけでもよい、わかることが出来るであろうか。」とゼミ旅行の参加は不安であった。

現地で水気耕栽培なる栽培法を草柳大蔵氏が紹介なさっていた。水気耕栽培とは大地に根をおろさず科学的に各々の植物が必要とする栄養素を調べ、その栄養素のみ与える、という根が水にゆれている栽培法であるらしい。

大地はどんどん荒らされていっている。人間までも狂わしてしまう農薬を色々な種類、多くの量を振りまく。そんな大地から育った植物、ましてや食物となるはずの植物までもがみずみずしい緑の下に恐しい毒をかくして食卓の上に載り、我々の体内に吸収されていく。荒廃しきった大地は切り捨ててしまい、水を“大地”として新しい栽培法を確立していく、という発想の切り換えがあっても当然のことであろう。

土にはびこる害虫もいなければ、凶々しく根を張る雑草もない。毒薬ともいえる余分な農薬は全く不必要だ。最新の科学を利用し、しかも“楽に”できる農業方法だ。その上、不必要なものは何一つない、必要十分な状態にある。なんというすばらしい方法なのだろうか。しかし、根は大地に張るものだ。大地がいわば母となって植物を育てるのに、母親が粗悪であるからといって、その母親を切り捨てて代理を用いる。私にはそれは、非人間的な行為に見えてならない。土の香りもせず、完璧な形でテーブルの上にトマトやキュウリやキャベツが載っている。食事までもが、科学のものさしで測られ、生活の為の道具にしかならなくなってしまいそんな危惧を抱いてしまう。

いったい自然農法とは何であるのだろうか。参加前と後で私にとって進歩し、前進したことは何もない。ただ一つ、他の畑や田の植物のように、整然と並び、成長促進剤のおかげですくすく育ったものを見るより、小さくても人間の作った合成物の世話にならず、しかも力強く育っている福岡正信氏の自然農園に育つ植物を見た時の方が、育てる者の愛情と慈しみが感じとれた。我々は見た、あの福岡正信氏の田んぼの根を。それはまぎれもなく大地に張った根である。太く、力強く固い。(なぜか別の所で私は柔軟にさえ感じた。)そして、現象を観察するという、つまり自然と絶えず接触している事の偉大さ。舗装され整備された街中に暮らし、土の上を歩くことさえなく、土を忘れかけている私にとってこのゼミ旅行は、土の存在の大きさというものを再確認することが出来た。

しかし、このゼミ旅行を大地讃頌、自然礼讃のみで終わらせてはいけない。荒廃しつつある大地は我々人間の責任なのである。荒廃させるものはいとも簡単かつ短期間であり、元にもどすことは人間の知恵では不可能に近い。サイエンスによる大気汚染や水質汚濁や大地の損傷をサイエンスによって埋合わそうとし、そしてそのため二次的汚染が拡がり、またサイエンス……。このように科学は発展し、進歩していくのは当然であろう。しかもこの発展は無限である。しかし、その道程は、地球を衰えさせていく。無限に拡がりゆくかのように見える科学もここに気付いた時点で、限界に達しているのではないだろうか。それに気付かず、科学者はもちろんのこと、我々全員が外側に大きな犠牲を残し、そのおかげの発展、進歩によって科学の無限性を信じているのではないだろうか。自分たちの外側とは、実は自分たち自身の問題であり、自身が渦中にあるのだということを認識しなければいけない。

福岡さんにお会いして考えたこと

甲南大学 文学部 三回生 小竹 代里子

私にとって初めてのゼミ旅行は、驚きの連続だった。

ゼミ旅行に参加する前に、ビデオと本で、私なりの福岡さんの人物像はできていた。そして実際に、自宅でお会いした福岡さんは「哲人」という私のいだいていたイメージと少しの差もなかった。どこか古風とさえ感じられた。

哲学道場に着いて、人の多いのに先ず驚いた。私は、福岡さんを囲んで、話を聞くことを期待していた。それだけに、討論という形での農法の話になると、つ

いていけない感もあり、口を出すのは恐れ多いと思ってしまった。このことは残念に思うけれども、福岡さんに文章や映像を通してでなく、直接、接することができただけで充分だとも思う。

行く前に、水道も電気もないとは聞いていたけれど、どんな風になるかは想像もできなかつた。今までは、飯ごう炊さんと言っても、水道もあれば電気もあるという所ばかりで、ロウソクと懐中電とうで夜を過ごすなど、停電の時以外では初めてだった。でも、生活（といってもたった二日だけれど）してみればできるものだな、と思った。元々、人はこんな生活だったのだから当然だろうけれど、電気・水道のある生活に慣れきった私には、それらのない方が変に思えたり、骨も折れた。

「異常も続けば正常になる。」というポスターを見たことがある。福岡さんの農場を見て、そのポスターを思い出した。整然と植えられている畑、耕された田、これらは人間が良いと思った方法で作られたものだ。でも、私は田畑とは、そうあるべきもの、と信じていた。福岡さんの言う「自然農法」は私には「農法」というものかどうか分からない。まいた種が育つかどうかは、「天と地のみぞ知る」のだから。経済的なことを無視して、自然の秩序に従うのなら、そして、「自然農法」を「農法」と言うのなら、「自然農法」は人間のすべき農業だろうと思う。

でも、頭ではそう思えても、所せん、私も福岡さんの望まない消費者だ。私は福岡さんの農場のみかんを見た時、思わず「汚いな。」と思ってしまった。汚れや傷のない、形の良い作物を上等とあってしまっている。

実際には不自然なもの（造られた緑）も自然と信じ込まれている。福岡さんが「今、私達の見ている緑が本当の緑ではないことを心にとめておいて下さい。」とおっしゃった言葉に驚き、そして、そのことはとても大切なことだと思う。

今年の夏、ピワ湖で湖沼会議があったが、そこで、ある人が「人間に役立つ資源だから守らねばならない。」と言った。「“人間”に役立つ資源」だから守る。では自然は人間のためだけにあるようではないか。そうではなく自然の中の人間であるはずだ。人間に役立つかどうかを基準とした、人間中心の考え方が自然界にまで悪を作ってしまった。

夜の反省会では、自分の思っていることを言葉にする難しさを感じた。又、他の人の意見を聞くことができたのは、私には大きな刺激となった。大学では、知り合いは多いけれどなかなか話ができない。初対面の人達もいるのに、あんな風に話せたのはゼミナールならではと思う。

火を囲んで、いろいろな話をしたり、花火をしたり、大阪では見られない沢山

の星や流れ星（願いごとを思う間もなく消えてしまったけれど）を見たり、カクテルを覚えたり・・・と思い出はつきない。

農場での福岡さんの生き生きとした姿はとても印象的だった。それだけになぜ福岡さんが引退を示唆されるのか不思議でならなかった。「自然農法」の最後に「風心」という詩があった。私はそれを読んで、もののあわれというか、わびしさを感じた。「一切が無」から始められた「自然農法」を、なぜ引退しなければならないのか。

改めて「風心」を読んでみた。

自然農法

甲南大学 理学部 一回生 井上 友雄

自然農法を初めて自分の目で見た時、「これはつまらない。」とってしまいました。山の中に種をばらまいたら芽が出て花が咲き実がなるのは当たり前のような気がしてならなかったし、又、現に私の家の庭でさえ何もなくても草木は生えてくるのですから当たり前という言葉が出てくるのは当然なのです。

では当たり前という自然農法をなぜ福岡氏は何十年の間研究してこられたのか、私はこの答えがなかなか見つからなかったのです。しかしふと私はある日家の庭を見て気がつきました。私の家の庭は単なる庭であるが、福岡氏の山は庭ではなくて農園、農場、畑、田んぼであることに気づいたのです。すなわち自然農法の“農法”という言葉が問題なのです。福岡氏は山の中で農業をやっておられるわけですが、農業という以上、生産性、品質などの面が大変重要になってくると思います。そのために福岡氏は研究に研究を重ねておられるのだと思うのです。

では自然農法とはどういうものなのでしょう、私は“自然”というからには「ほったらかす、何もしない頭のいらぬ農法」だと思っていました。しかし、それでは農法ではないのです。私は農法というと、あの山小屋の囲炉裏の火を思い出しました。私はあの火を起す時の難しさを思い出した時、「これだ」と思いました。マッチで火をつけたら勝手に火は燃える、燃えるのは当たり前であると思いきや、火を燃やし続けるには、木をくべてやらなければならないし、くべる木の大きさや本数も考えなければいけないし、火が消えてから木をくべてもしょうがない。すなわち木をくべるタイミング、木の置き方などいろいろ考えながら、火に気をくばっていなければ火は消えてしまいます。火というのはもち

ろん自然です。私は、福岡氏の木や、現地へ行って直接、福岡氏の話聞き、農園を見て、私なりに考えてみると、自然農法と囲炉裏の火は似ているという結果が出ました。自然農法をするには、自然にまかせっきりにするのではなく、土を調べ、植物を研究し、天候を観測するなどして、それらをうまく自然に働きかけて農業をするというのが、自然農法であると私は考えます。それゆえ、自然農法を行うには、長い年月の研究が必要であり、技術の習熟も又、重要なことの一つであるので、なかなか簡単に自然農法を行うことができないでしょう。ですから現在の農業はいわば考えなくていい農業、すなわち、化学農業へ向いてしまうわけです。囲炉裏の火だってそうだと思います。灯油をぶっかけてやれば、簡単に火はつきますが、しかし、もし灯油とまちがえてガソリンを入れてしまったりすると、たちまち大きな事故になってしまいます。このことは農業にしたって同じなのです。人為的に手を加え過ぎると、かならず間違いが出てくるものです。そして大きな事故につながるわけです。現在の農業は、もうすでに事故の段階に来ているのかもしれない。

化学農法にしろ自然農法にしろ、一長一短があります。福岡氏にも農業をもっともっとがんばって頂いて、私達も本当の農業、最も現在必要な農業を作っていかなければならないのではないのでしょうか。

福岡さんにお会いして・・・

甲南大学 文学部 三回生 村松 伊津子

三泊四日という短い期間でしたが、この合宿は、私にとって、とても大きい意味をもち得たように思います。普段、自然を感じるなどまったくしない生活をしているのに、急にガスや電気、水道でさえ十分にはない所へ行ったのですからいやでも自然が体にしみ込んできます。一日目はそんな感じでした。二日目になって慣れてきたのか、太陽が沈むとあたりは暗くなること、火は自分たちでおこし調節しなければならないこと、トイレは、土をじかに掘ってあるだけで、水を流せば消えてくれるトイレじゃなくて、便所だということ、等々、一日目に苦痛に感じたことが、体になじんで、それが当然のように思えるようになるのです。考え方が変わってそうなるのではなくて、体が変わってきて、無意識に頭の中に何か空間的なものが入ってきたような感じがします。

そんな環境の中で福岡正信さんにお会いしました。合宿前にビデオで拝見していたことや、福岡さんの哲学に共鳴する部分も多くあり、初対面の時、とても身

近に思えました。一日目は、福岡さん自身が田や畑に入っただけの説明がありました。福岡さんの田は、化学農法の田と隣り合わせにあり、いろいろな点で比較することが出来ます。田に手を入れると化学農法の田は5cmぐらいしか入らないのに福岡さんの田はもっと奥まで入ったり、二つの田の稲の根を比べてみると葉は化学農法の方が、立派で量も多く太いのですが、根は自然農法が、長く、いくつも枝分れしていて、地にしっかりついていることがわかります。1本あたりの実の収穫量も多いそうです。経済性からもこのような実績をあげているのですが、福岡さんは迷っておられる様子でした。道路建設のために夜生え草が発生して、手がつけられなくなっていたのです。

哲人のイメージしかなかった福岡さんの、このような姿を見て、私は人間くささを感じました。ちょうどその日は、評論家の草柳大蔵氏が来訪し、テレビやラジオが作ったペースにどんどん乗せられて、もっと根本にある本質が、飛ばされ、表面だけをなぞったやり方を、じっと見ているだけだったのです。少し失望を感じながら討論を聞いていました。討論に参加した人達は、地元の農業を営む人々が多く、実質的な自然農法のやり方についての質問が多く出ました。それは、農業で生計を立てている人だけに迫力のあるものでしたが、それに素直に答えている福岡さんに、何か割り切れないものを感じました。自然農法は、無の哲学を悟ってこそ、初めて出来るものであって、効率が良いというだけでは、決して出来ないものだと思います。私は、そこに、それだけでは済まされないものがあるんだ、と何度も叫んでいました。

日本の現在の農業は、ほとんどの地域で、化学農薬を使用しています。私の家の近くでも、多くの農薬を一度に散布する光景をよく目にします。経済性を上げようと、少しずつ肥料の量も多くなり、又害虫にも抵抗力がついて、少しでも死なないため、ますます毒性の強い農薬が使われます。それらは私達の体に蓄積され、子供にまでも運ばれ、やがて私達は人間の機能を十分に果たすことのできない体になってゆくのですね。私は大学一年の時、カーソンの“沈黙の春”を読み、その恐ろしさにびっくりしました。知らない、考えないということは、こんなに私達を近づいてくる危機から遠ざけてしまうのです。その意味で福岡さんが、テレビに出演し、本を書き、自然農法をまず実践することに積極的なことは当然なのかも知れません。しかし、真に自然農法の本質を理解しなければ、この危機は遠ざかってくれません。この切羽詰った危機感が、福岡さんをあせらせているのでしょう。

二日目は、福岡さんが山の中に入って、説明されました。いろんな木が、いっしょに共存しているのに驚きました。そんな福岡さんを見ていると、前日の悩んでいた姿などどこにもなく、四十年間、信念を貫き通してきた人の大きさだけを

感じるのです。

私はこの合宿で、最後まで農業がいかにあるべきかという確信を持つに至らなかったけれど農業を営むべき人間の姿は無意識に体の中にしみ込んだような気がします。

自然農法について思うこと

京都府立医科大学 四回生 杉林 稔

今回のゼミ合宿では自然農法を通じて、農業というものと人間とのかかわりについて考えさせられることが多かった。農業が人類の歴史に登場したことが、現代の国家の原型である農耕社会の発生を決定づけたことを考え合わせれば、非常に興味深い問題であり、人間存在の中心に触れる事柄であると思われる。

福岡氏の自然農法の発想の根本には「人智・人為を排除して、裸の自然のもつ力のみを信頼して」という言葉もある。そのことは、つまるところ、農業の本来の姿として、食用植物の採集を想定していることになると思う。言い換えれば、栽培という行為を不必要な人為としてとらえており、それが歴史的事実であり、また真実だと私も思う。

福岡氏は科学農法がいかに自然そのものの植物栽培力とくらべて非力であるかを力説する。しかし、私には、科学農法の無力さよりも人間に与える害の大きさの方がより重要であると思われる。つまり、現代の科学農法は「経済性の追求」がその原動力となっていて、農作物は科学の手が加われば加わる程、商品としての価値があがる。そして人々は、より変ったもの、より目新しいものを求め、それが科学農法に拍車をかけるという悪循環に陥っている。我々はこのことにこそ目を向けるべきだと思うのである。

実際に農場を見学し、福岡氏の説明を聞いていて感じたことは、氏がその農場を自然農法の正しさの証明のための実験農場としているに過ぎないのではないかということであった。しかしこれは単なる懸念であろうし、またそうでなければ困る。自然農法の理念に従えば、人は自分の住む土地という自然と同化して、食物を採集してそれを食べ、木を集めて家を作り、つまりは自給自足の楽園を築くことであり、そのような楽園の存在そのものが科学農法に対する唯一の批判になるはずである。しかし、福岡氏の農場はそのような楽園にはまだ至っていないように思われた。伊予市の山もそれだけ科学農法にむしばまれているということだろうか。これもまた懸念。

科学農法の発想の奥に秘む科学信仰と、自然農法の発想の奥に秘む自然信仰。人間をトータルにとらえようとする時、この二つは無視することはできないし、私たちの日常生活においてもこの二つがさまざまな形をとって、私たちの前にあらわれてくる。

「科学農法に優るとも劣らない成績をあげることができるかどうかの検討」を急ぐあまり、元来科学農法と自然農法とは比較の対象ではないということを忘れてはならないだろう。これはすでに福岡氏だけの問題ではなく私たち自身の問題である。

批判めいたことを書き連ねてしまったが、福岡氏の農場で三日間、十二分に自然と親しむことができたのは手放しでうれしかった。あの楽しさの中に自然農法の本当の姿があるような気がする。

ゼミ旅行に参加して

甲南大学 理学部 一回生 川上 義雄

「ただ何となく」参加したゼミ旅行（行先は自然農法家、福岡正信氏の自然農園）、しかし、それは僕に素晴らしい四日間を与えてくれました。

自然農法の山の中は「これが農園!？」と思うくらい草木がごちゃごちゃ（何とキウイまでもが生っていた）。でも、ごちゃごちゃ（雑然）ではあるが、ごちゃごちゃ（不自然）ではないんです。それどころか、とっても美しいんです。みんなそれぞれ“生きている”って感じなんです。福岡さんが、枯れてカラッカラになった大根をもち、その種の入った袋の部分を指さして「大根が腐らないでこのようになったのは、種ができた時、まく季節（とき）ではなかったからだ。その季節がきたら、大根の種は袋がやぶけてかってに散る。大根は死んでいるようだが実は生きている。そして、生きるための智恵を持っている。人間が手を加えることにより、それが狂ってしまう。」というようなことを言われた時、僕はなんというか、すごい衝撃を受けたのでした。それは“生”に対する感動でもありました。

人間が本来生まれつき持っている智恵というか感覚というものが、科学の発達、文明の発展といった睡眠薬によって、眠らされてしまっているのではないのでしょうか。

農業において水気耕栽培という新技術が現在注目されています。“農業の革命”だとか言われています。「野菜・果物はたわわに実り、食料危機はこれでなし。

しかも、土を使わない！！、使わなくてすむ土には自然がもどる」そうで…。しかし、これも自然の中のある部分をひっこぬいてきて、人の手を加えたものにはすぎない——ひとつの睡眠薬——と思うのです。確かに実りは多いようです。それ故、生活は安泰です。食糧危機はないと思われていますが、これでいいのでしょうか。自然を見つめ直そうと叫ばれつつある現在ではあるが、この“生活”という言葉が、人々の身体（からだ）や精神（こころ）の中にしめる重さを考えると、やはり「生活安泰」の方向へ流れてしまうのでしょうか。僕自身流されています。自然農法と水気耕栽培どちらをとるかといわれると、水気耕栽培をとってしまうでしょう。あくせくあくせく人間は働いている。——福岡さんのもとに集った人達の声は、実に生々しく「生活」というものの重さをかたっていました。

自然農法とは“生活する”ための農法ではなくて“生きる”ための農法——土の上を歩く福岡さんは、とつてもでっかく、そして、ひとみは吸いこまれそうに澄んでいました。

「生活」とか「生きる」とか、かつてに書きましたが、「この言葉を本当に理解しているのか。」と言われると、実にいいかげんなものです。——「追憶」というアメリカ映画の中で、「僕はあまりにも安易だった。だが、この国はもつゝ安易であった。・・・」というようなセリフがあります。このゼミ旅行に参加して、このレポートを書いていて、この言葉がなんとなく思い出されました。

あの自然農園の草木を見たときの、とうてい言葉では言い表わすことのできないあの感動、あれが「生」というものへの喜びではと思うのです。

自然農法から学び得たもの

電谷大学 文学部 一回生 小泉 さより

自然農法とは一体どんな農法なのか。私がこれを理解するには、農業に関してあまりにも無知で無関心であった。私はこの十数年、農業一筋に土と一体となって働いてきた父を見てきた。にもかかわらず、このような機会を与えて頂くまで何ら深く考えることがなかった。自分自身が情けなく思えた。

自然農法による水田の稲は背丈が短く不均等であるだけでなくその下にはクローバーが茂っていたが、ヒエは意外に少なかった。「こんな稲で米が穫れるのだろうか」と思ったが収穫量はというと科学農法のそれと同じ、もしくはそれ以上であるという。そしてさらに私を驚嘆させたのは、雑草の中での野菜栽培である。

そこはミカン畑でもトマト畑でもなかった。何種類もの野菜が混植され、雑草と共存共栄している姿を目のあたりにして、「これが自然の姿なんだ」と実感した。

ところで一般に同一種類の野菜を集団で作ると病虫害を招くことになるが、自然農法による栽培法では被害はわずかだという。

今日、生産者にとっての課題は、近代科学に立脚しながらも自然の生態系を尊重しなおかつ食糧供給を経済的に成功させることである。この点において近代農法は数々の問題を含んでいる。

第一に土壤問題である。化学肥料が土中の微生物を弱らせ死滅させることによってもたらす重大な結果はほとんど黙認され、連作による土壤病害をいかになくすかという点にばかり目が向けられている。このような状況が進行していけば必ず地力を減退させることになるであろう。

第二に農薬の汚染問題である。農薬は主目的である病虫害や病原菌の駆除だけでなく、自然界のバランスをくずし公害発生の根本原因となっている。しかしここで忘れてはならないのは、生産者が生産性や収益率のために農薬汚染を引き起こしたのだという事実だけを問題視している、消費者の姿勢である。

従来農作物は、より美しい、おいしい、大きいものがよいという感覚によって商品価値が決定されてきた。このような事実がある以上、生産者はその要求を満たそうとするのが当然である。そこで、商品価値の高い農産物を生産するために、自己への身体的影響を顧みず農薬を散布し、それが結果的には公害を生じさせた。ここで消費者は、自分が一体何を求め、反対の立場の場合どうするかということを考えてほしい。

このように科学農法と自然農法のあり方について考えている時に、「野菜工場六十二年 実用化」という新聞記事に接した。これは自然条件にまったく左右されないコンピューター野菜栽培の「完全人工制御型工場」である。

しかし仮にそれが自然条件を克服したものであってさらに安定生産、生産調整が可能なものであったとしても、それは農業の領域を越え、自然の摂理に反するものになるのではないかと、強く反発を感じている。

自然農法は不可能であると考えながらもそういったものの必要性を考じ、そしてそれは単なる農業技術の革命にとどまらず、現代人の生き方そのものを変える革命になるであろうと感じている。と同時に私達は、私達に課せられた課題を冷静に、かつ早急に行なわなければならない。しかし、それには農業に対する生産者と消費者との相互理解が先決であり、前途には困難な問題が山積みされているのである。

農法以前

甲南大学 理学部 一回生 前田 幸俊

人間が地球上に誕生してこのかた、生物としてのそれまでの進化の流れから、新しい一步を踏みだせたのは、まさに「知能」を発達させたからであるが、この「知能」というものは、人間が自然界の弱肉強食の世界で生き残るための方策としてよりも、物事を考えるための「暇」が生活に発生した時点で人間的な知能——物事を総合して考える力——として発展してきたのではないかと思う。人間と動物を分けているこの「考える」ことが、人間の文明を築きあげたとするならば、強制的に何かに追いつめられながら物事を考えるのではむしろ人間らしい理性的見方や科学的な物事の見方はできないのではないかと思う。

いわゆる自然農場は、ただそれだけを見ていても「健康的」・「人間に自然を取り戻す」といわれている「有機農業」と何ら変わらないように思える。しかし、僕のこの思いを変えさせたのが、福岡氏特有の「科学性」だったのである。

さして広くもない農場だが、ありとあらゆるものを混植させている。いや、「勝手に生えている」状態に保つことを明らかに目指しているのだ。自然の営みは確かに素晴らしい、草や木は太陽エネルギーを蓄えまたそれらが動物、微生物、人間にあらゆる形で「利用」され、そして母なる自然＝土壌へと帰していく。しかし我々は、ありのままにこの働きを見ているのだろうか。人間も自分を取りかこんでいる自然も含めて、全て決して「必然的に」存在しているのではないのであって、植物も人間や動物が利用するために実をつけるのでもない。すなわち自分の子孫を残すことさえ、所せん必然性がないことになろう。それにしても今ここに存在しているのである限りそれらは皆意味をもっと考えられるし、考えたい。

人間だけが自分に都合のよい「科学的必然性」を自然に持ち込んだ。彼らは自然は利用するものだと勘違いした。同時に彼らの知能によって発展して膨張した知識は、今や、その主人である理性をおいぬいて科学技術という「怪物」になり、その多領域にわたる分化は、人間をして、総合的に物事を考えさせる意欲を失わせ、自分の専門でない事柄への関心を、急速に失わせた。いわゆる科学者はかくて「密室の魔法使い」となり、彼らの作る品物は、中味の不可解なブラックボックスになってしまった。

この点福岡氏は密室を出た科学者であり哲学と科学が、ただそこにあるだけで仲良くできたギリシアの自然哲学者のように自分の目で物を見、考える人であった。「自分はいつまでたっても、どうすればよいか悟れない。今だに悩んでいる。」と言われた。もし彼が「結論のない思考」を続けているのだとすれば、まさに流動しつつある自然をありのままに見ておられることにならないだろうか。

膨大な知識は人にその解釈を急がせ、人を近視眼的見通しへと陥れる。草柳大

蔵氏の述べられたハイポニカ農法（水気耕栽培およそ自然農法とは相容れない農法）に福岡氏が反論せず聞き入っていたのも自然の営みの中に、この栽培法と重複するものを見い出せないかを探そうとしておられたのだとも思える。

現代は確かに、食料に関してのみならず、あらゆる面での人間の危機の時代である。しかし、別の考え方をすると人類のごう慢さへの反省を促すものとしてこれは新しい次元へと飛躍する絶好のチャンスでもあるのかもしれない。

農業と人間について

立命館大学 文学部 二回生 佐保田 圭吾

農業の目的は、人間の食糧を生産することにあると思う。食糧は単に物質としてあるものではなく人間存在の基幹になるものであり、人が人として存在するのに不可欠なものである。

それ故にこそ我々は、工業化された社会に対するアンチテーゼとして、農業に牧歌的で土に生き根をおろして働く人間の姿を期待し、人に管理されるのではなく、自然と共存する緑なす田園を夢見て、そこから生産される作物からまさに生きる糧としての食糧を味わいたいと考えるのであろう。

しかし、今回のゼミ旅行を通して知ることのできた農業の姿は無残なものであった。農薬や化学肥料の害もさることながら、社会の欲望の体系に組み入れられた農業には、もはや心の平和を感じさせるような、食糧を作るという仕事をする誇りはひどく希薄であった。そうならざるをえないという農家の苦悩が、討論会を通じて肌で感じることができ、考えさせられた。そのようにならざるをえない理由を単に政治・経済にのみに負わせることはできないであろう。むしろ現代日本における精神の貧困にこそ、その真の理由が存在するように思われる。

何故に福岡正信氏が「自然農法」において単なる農業における方法論に留まらず、哲学的な問いを発せざるを得なかったか、又それが現代農業の危機を乗り越えるためには不可欠な要素であることがここから理解しえるのである。

農業が自給自足体制から第一步を踏み出して以来、それが現代のアグリカルチャービジネスの段階に至った過程があるのは当然だろう。否、人が自らの食糧を自ら耕して生産するのではなく、それを購入する時代になった時からの必然であったかも知れない。

そして今や耕地は農薬と化学肥料とトラクターによって管理される工場と化しつつある。その工場はひどく不完全で、人間を疎外する“死にゆく土地”である

福岡氏がその農園を案内された時、我々には一様にその姿がひどく大きく感じられた。氏が土と一体となって、まさに土に生きる人としての姿を見ることができたからだと思う。無から出発されて自然と農の合一を果たされつつある哲人福岡氏の姿は、土に疲れ、土と闘うことによってかろうじて保たれているかのようであるが、その真の姿は科学に支えられた農業に対する本質的な批判である。

土に対する鋭い感性を必要とする自然農法が、休日にもみ農作業に従事する兼業農家に、はたして可能かどうかは、はなはだ疑問である。又、利潤の追求のみを至上命令としている農民に受け入れられることも困難であろう。

しかし、食は確保されねばならないし、又、安全なものでなければならない。生産する者も消費する者も等しく目前に迫りつつある問題と取り組まねばならないのである。それには、現代農業についての種々の研究や消費者側の価値基準の変換、様々な機構的改革が必要であろう。そして、その根底には農業と人間についての真剣な問いがなされなければならないと思う。もし、それがなされないならば、我々はけっして“食”を二十一世紀まで確保し続け得ないのではないか、と思われる。

最後に、谷口先生並びにサマーキャンプでお世話になった松山市民会議の皆さんと、今回のゼミ旅行を企画運営された谷口ゼミの皆さんに深く感謝いたします。

ゼミ合宿後日談

甲南大学 経済学部 四回生 大野 幸彦

田も耕さず、肥料もやらず、農薬も使わず、草もとらない、本当の意味の自然農法。そして、それを提唱する福岡正信氏に出会うというのが、今回のゼミ合宿の趣旨であった。

確かに、実際に氏にお会いし、その農園を見せてもらい、そして、お話を聞かせてもらったのだが、農園をあとにした今、何とも言い難い、わだかまりのようなものが残っているのはなぜだろうか。

福岡氏の稲は、根がよく育ち、そして丈が短い。一見して他の田の稲とは違っていた。そしてその収穫も、良好だと聞いた。

農園の中の山小屋で、我々は寝泊まりさせてもらったのだが、季節的なこともあるのだろうか、山小屋の周囲の野菜は、収穫できそうな様子ではなく、時折、ユニークな共生をみうけるぐらいだった。

今回の訪問で、何より残念だったのは、果樹園へ行けなかったことだろう。福岡氏の著作の挿絵にある果樹園には、みかんがたわわに実っている様子があり、ここでの収穫が、最も成功をおさめているという。

私達が訪ねた時、福岡氏の農園ではサマーキャンプなるものが行なわれていた。そこでは、周辺の農家の人たちや、評論家の草柳大蔵氏らを交えて、まさに活発な討論が交わされていたが、私達の求める福岡氏の自然農法の話を書くことはできなかった。

最終日、初めて福岡氏自身の案内で、農園を見せてもらった。ここで、初めて氏の考えの片鱗を垣間見たように思う。しかし氏が、“夜生え草”に困惑し、また草柳氏の紹介される新しい水気耕栽培に興味を抱かれる様は我々が描いていた自然農法家の姿と、少しちがっていた。

また、「除草を目的としてクローバーの種をまき、そしてそれを枯らすために田に水を入れるといった人為的な手段があった。」となると、何だか前もって自分なりに想像していた自然農法の概念と、段々とかけ離れ、その全体像がぼやけてしまった。

これらの感想は、実に卒直な想いである。中には実には的はずれなところもあるかと思う。しかし、僕にとって、これ以上のものを感じとることはできなかった。従って、僕はこれを福岡氏自身に対する気持ちとする気は毛頭なく、ただ単に今回のゼミ合宿の感想としたい。

山小家の生活は、私達には慣れないものであり、一つ一つが要領を得ず、ひたすら生活に追われたゼミ合宿であった。しかし、これはこれで、また何らかのものを得られたような気はする。

ゼミ合宿から戻って、結局何だったのかと考えて見ると、やはりこれは“会い方”が悪かったのではと思う。これだけでも有名になられたのだから、氏は既に社会的な存在である。環境や、農業の今後に対する氏の発言も社会的な力を持つであろう。このことにおいて僕は幾分、首をかしげる所もなくはない。

しかし、僕個人にとって、氏の存在はやはり一つの思想であり、またそうであってほしかったのである。農、いや自然に対する氏の姿勢や考え方を感じとりたかった。社会というものから切り離してである。

いや、こう考えること自体、最初から無理だったのかも知れない。農自体が社会的であり、人為的だとする考え方もある。

ともあれ、当初の趣旨どおりには、どうもいかなかったゼミ合宿となってしまったのかもしれない。何とも後味の悪い書き方ではあるが、やはり僕個人にとって“会い方”が悪かったのだろうと思うのみである。

文明と思想——自然農法を通じて

京都府立医科大学 四回生 津本 学

今回のゼミ旅行は、私にとっては初めてのものであり、また、事前の準備として福岡氏の著述による「自然農法」に一通り目を通したに過ぎなかったため、その位置づけも、目的意識も明確には持ち得ぬまま、氏の著書から受けた印象から、頭で理解しようとするよりは、虚心に見、感じるままを心に留めようと、そのみを念じての参加になった。

自然農園を歩くうちに、先ず目にとまったのは、そこにある植物群の余りにも雑然と生茂ったさまであった。それは私たちが普段都市に生活する中で、かろうじて接することのできる「自然」であるところの緑地公園などの有する、調和的、構成的な整然たる姿とは、全く趣を異にする。何かしら圧倒的な力感と躍動性を秘めた存在を感じさせるものだった。そして、それらを背景に語られる福岡氏の姿は、自然の中での人間の在り方として最も望ましいものの一つを見事に示すとともに、私たち現代人に鋭い疑問を投げかけているように思えた。

長い歴史の中で、人は実生活上の快を求めるべく種々の利器を造り、自然と競合してきた。また、それと並行して、自らの在り方を求めて止まなかった。前者を物質文明（以下「文明」）と、後者を精神文明或いは思想（以下「思想」）と名付けるならば、人類が嘗々と築き上げてきた「文明」は今やその頂点を極めんとし、私たち現代人はその中で何ら不足のない快適な生活を送っているような錯覚に酔っている——「文明」の弊害としての自然破壊、生態系のかく乱が、やがては私たちの身に及ぶであろうことも忘れて。一方、「文明」の発展に伴って、「思想」は分化の度を進めると同時に実生活より遊離し、社会から一步下ったところに定住してしまった感がある。「思想」の裏打ちの無い「文明」。そこでは対症的な改善（!?）のみが進みゆくべき指針となり、自身への根本的な問い直しも巨視的な意味での先行きの見通しもない。その中で、人は次第に人らしさを失ない、「文明」という主の下に踊らされる隣れな羊に墮落してしまう。そして生み出されたもの——核・公害・人口・食糧問題——どれ一つとっても人類の滅亡に直結しないものは無い。「思想」は紙上に残るだろう。しかし生物としての人類がこの地球上に生存し続け得る道は、その同じ紙上に示されているのだろうか？

この病んだ現代に残された唯一の救済の道は「自然に還る」ことであると、即ち「人はただ自然に従って生きれば良い」と福岡氏は言われる。氏の言葉は生活実感に根ざすもの故、力強い響きをもって私たちに迫るのだろう。私には特に、

氏がある若者に言われた「観念の中で迷うことを止めなさい。君の実感は何処にあるのですか。」の一言が忘れられない。

思想と生活が一致した福岡氏の生き方は私たちに進むべき道を示す一つの規範たり得るものであり、氏の歩みは人間存在の原点に向って着実に進んでいるように思われる。ただ、座談会において氏が時折り見せられる焦りにも似た言動を目にするにつけ、私たちをとりまく現代の危機的状況が、考えるほど容易に脱し得るものではなく、“否”、回復不能点、即ち破滅への急坂にさしかかろうとするまでのタイムリミットは想像を超えてはるかに短く、終えんの日是最早いかな方策をもってしても回避できぬほど私たちの眼前に迫っているのではないかとの危惧を強く覚えた。

何処に思想の原点をおくか、それを如何に生活と結びつけるか。今回のゼミ旅行は考え直すための好原料を与えてくれた。

(福岡氏、谷口先生並びに今回色々と御世話になった甲南大学の皆さんに感謝します。)

ゼミ旅行運営後記

甲南大学 経済学部 三回生 高井 賢一

今回のゼミ旅行の幹事を終えて、その感想と気づいたことについて述べたいと思います。

何よりも、このゼミ旅行を通して得たものが多かったということです。電気もない、水道もない山小屋の生活、色々な人との出会いなどです。その中でも福岡氏に直接会うことができ、そしてお話をじかに聞いたことは我々にとって大きな収穫でした。お会いするまでは、本やテレビを通してしか接することができなかったのに、本当に感激でした。そして、草柳大蔵氏とお会できたこともしかりです。大変有意義な時を持てたと喜んでおります。

しかし、また、反省することも多々あります。まず、準備段階での我々と現地との間のコミュニケーションの不足です。現地に着いてみると福岡氏の農場では、地元の放送局の主催するサマーキャンプが開催されておりそのため我々の旅行に様々な予期せぬ事態が生じてしまいました。一応サマーキャンプの開催は、二、三日前に知らされてはいましたが、その趣旨や内容についてはほとんど不明であり、我々がその一員に組み込まれていることすら知らされていなかったからです。

我々には今回のゼミ旅行で、福岡氏とは、ただお会いしてそのお話をうかがい自然農法の実際を見学させていただいて、前回のゼミ旅行からの継続的課題である農業や食糧問題について参考にさせていただければという意識しかありませんでした。しかし、実際にはマスコミの騒音の中で、本来我々が求めていた本質的なものが見失われてしまったように思えます。また余談ですが、キャンプのパンフレットに甲南大学農学部と記されていたことです。甲南大学には農学部はありません。

そして、次に反省すべきことは、都会から自然の中に飛び込んだ我々が、その開放感から少しばかり羽目をはずしてしまったのではないかと心配しております。

また三日間、何の勝手もわからない山小屋生活で、がんばって下さった参加者全員に感謝します。特にこのゼミ旅行を運営するにあたり、色々と手助けをして下さった、他大学の方々、そしてとりわけ本学の和田浩一君には運営面で補佐してもらい、紙上をかりてお礼を言いたいと思います。

「純粹経験」の概念について

——西田 幾多郎 「善の研究」を中心に——

甲南大学 文学部 社会学科 四回生 池上 与志人

私の卒論の題目は「純粹経験」の概念についてであり、副題を西田幾多郎「善の研究」を中心に、としました。

西田幾多郎は、近代日本の哲学者として高い業績を残した人として、その評価を惜しむ人は少ないようです。西田の哲学は常識的理解を越えていて、その深遠な性格は深く私達の胸中を揺さぶるものであるかもしれません。西田は宗教と哲学の接点で独創的な体系を残しその独自の表現方法は論議のある所です。

さてそのような西田の哲学へと近づいていくアプローチの仕方の一つに彼の哲学の論理構造、いいかえれば西田の思惟の特徴は何であるのかと問うてみることも一策ではないかと私は考えました。

「善の研究」において見られる随所にちりばめられた特徴的表現は、確かに西田の思惟の特色を示していると思われました。その特徴的思惟の表現には次のようなものが散見されました。

「程度の差」

「絶対的区別はない」・「相対的な区別」

「同一物の見方の相違」

「内外の区別なし」

以上の特徴的表現は西田独自のニュアンスを含んで本文であらわれてきます。

これらの表現の底にはひとつの西田の彼自身の哲学に対する姿勢が一貫して読みとれました。それは簡潔に言えば、従来の哲学の態度・主知主義の見方を排した西田独自の一元論（意識一元論）的見方です。主知主義の見方は特に西洋の近代の哲学において顕著であった主観と客観を対立させてそこから出発する考えであり、主客の対立をまってその交渉により考えを始めるものでした。しかし西田はこれを厳しく拒絶し、主客の対立の基盤に主客未分である事実を見すえ、そこを純粹経験として概念的基礎付けを与えたのでした。

ところで私は次に純粹経験の概念の構造とその特徴を把握しようとしてきました。

構造として明らかにされる純粹経験の概念には三段階があります。

まず主客未分の段階です。これは直接経験（事實的体験）とも呼ばれます。次に主客対立の段階です。これは反省的意識即ち思惟です。最後に主客合一の段階

です。これは西田によって知的直観と呼ばれ、純粹經驗の理想の状態です。

直接經驗と知的直観が対照的に考えられた場合、それは未だ未分なる純粹經驗と既に合一した純粹經驗といえるでしょう。しかし、直接經驗と知的直観、主客未分の事実と主客合一の事実とはいづれも本質において変りはなく、純粹經驗のアルファでありオメガであると西田の言う所と同じで、端緒が終結で終結が端緒であるということです。

主客未分なる純粹經驗と主客合一なる純粹經驗とはどちらも差別相を有し自発自展するものであり、分化的側面を有した統一的側面もあり、統一的側面を有した分化的側面もあるということです。

厳密にはこのように考えられると私は思いますが、表現が困難になっているのは否めません。簡単に割切って考えれば、直接經驗の含蓄的統一が、反省を経るとき分化し対立し、それがさらに顕現的に再統一されると思われます。このことは、「先づ全体が含蓄的 implicit に現れる、それよりその内容が分化発展する、しかして比の分化発展が終った時実在の全体が実現せられ完成させられるのである。」という西田の言葉を考えればよいと思います。

さて純粹經驗の概念の特徴については「善の研究」の序文を参考にして、「經驗を能動的と考ふる」と「個人的區別より經驗が根本的である。」という西田自身の言葉から、能動的性格と超個人的性格とに注目することにしました。

能動的性格とは純粹經驗の概念が構成的で創造的であるということです。それは純粹經驗の先の三段階を通じて全体として能動的なのです。その訳は純粹經驗が差別相を含み自ら発展する所にあるのです。

このことは、「個人的經驗とは經驗の中に於て限られし經驗の特殊なる一小範圍にすぎない。」という言葉や、「純粹經驗は個人の上に超越することができる。」という言葉、また「經驗は時間、空間、個人を知るが故に時間、空間、個人以上である。個人あって經驗あるのではなく、經驗あって個人あるのである。」という言葉においてよく知られると思います。

通常個人的な自己は自己、時間、空間において理解され意識しているが、それは主客の対立において考えられているものであって、全ての意識現象の根底に横たわる純粹經驗の主客未分なる事実としては考えられていない。むしろこの主客未分なる事実としての純粹經驗が個人的な自己を基礎づけるのであると考えられます。

以上のように考えるのはもっともであるかもしれませんが、しかし、自己の基底はすぐ様に全体性へと通じているのではないかということが私の思い及ぶ所でした。

そこでこの全体性即個人性、個人性即全体性として、また外即内、内即外の意義を言葉としてはっきりさせたいと思い経験相なるものを考えました。

まだこの考えは私の内で明確になりえたものでなく「善の研究」をあたって心に残ったことでした。

簡単には、仏教の三法印に含まれる諸^法無我の示唆するものが私の考えにありました。究極的な次元では、個我なるもの、さらには私という存在は超越即内在であり、内在即超越であるとしか表現しえようのないものであると思います。西田の以後の体系はこのような方向にあるのだらうと私は考えています。

——— 参考文献 ———

- ①西田幾多郎全集第一巻「善の研究」 (岩波書店)
- ②下村寅太郎著「西田幾多郎」人と思想 (東海大学出版会)
- ③高坂正顕著作集第八巻「西田哲学」 (理想社)
- ④中村雄二郎著「西田幾多郎」 (岩波書店)
- ⑤沼田滋夫著「西田哲学への旅」 (北樹出版)
- ⑥末木剛博「西田幾多郎」その哲学体系I (春秋社)
- ⑦森有正著「経験と思想」 (岩波書店)

理性と感情について

——ルソー「エミール」をめぐって——

甲南大学 文学部 社会学科 四回生 川崎幸千代

(目次)

序

- I 「エミール」における教育目的
 - 1) ルソーにおける教育
 - 2) 理想的な人間教育
 - 3) 目標

- II 「エミール」における消極教育

- III 肉体の訓練

- IV 「エミール」における感覚教育
 - 1) 幸福
 - 2) 先見の明
 - 3) 子供の地位
 - 4) 感覚教育
 - 5) 自由の行使

- V 理性と感情についての考察
 - 1) 自己愛
 - 2) ルソーにおける人間観
 - 3) 良心と理性 (感情と理性)

結び

註

序

我々は、社会生活の上で、さまざまな機会に理性的人間であることが要求される。例えば、議論の場がそれである。議論が感情によって動かされるとき、そこにあるのは感情と感情のむき出しの戦いであって、議論は議論としての本質を失い、単なる決闘と区別のつかないものになる。感情は議論においてやはり抑えられ否定されるべきものなのである。この場合、感情を抑えるのはやはり理性であろう。このような、理性に克服されるべき感情に対し、美しい景色を見て「ああ美しい。」と思ったり、子供が川に落ちかけているのを見て「あっ！あぶないっ」と思ったりする感情がある。このような感情は、真に人間的なものだと私は思うのである。従って、理性的人間が、人間として必ずしも良いとは思われないのである。そこで、このような感情 (sentiment) と理性 (reason) についての考察をここで、ルソー (Jean Jacque Rousseau, 1712~1778) の「エミール」 (Emile, 以下、引用文はEで示すことにする。) 第一篇、第二篇をめぐって行なうのである。

従って、私は、「エミール」を教育論として扱い、彼の教育について考察をしながら、彼の理想的人間は、どのような人間かを探り、同時に、理性と感情についての考察を行なおうと思う。そこで、前半部分では、ルソーによる教育を論じ、後半部分では、理性と感情について論じることになる。

I、「エミール」における教育目的

1) ルソーにおける教育

「万物の手を放れるとき、すべては良いものであるが、人間の手に移るとすべてが悪くなる。」 (E. p. 23) とルソーが述べるとき、「万物の手」とは「自然」を、「人間の手」とは「人為」を意味する。つまり、ルソーにおいて、「自然」は良いものであるが、「人為」は悪いものなのである。

私は、ここでの「人為」は「教育」を意味していると思うのである。なぜならば、続いて次のようにのべるからである。「なにひとつ自然がつくったままにしておかない。人間そのものもそうだ。」 (E. p. 23) 又、「しかし、そういうことがなければ、すべてはもっと悪くなるのであってわたしたち人間は中途半端にされることを望まない。」「植物は、栽培によってつくり、人間は教育によってつくれる。」 (E. p. 24)

だから、冒頭の意味は、人為である教育によって人間の本性が墮落させられてしまう、という意味となると思われる。しかし、ルソーはこのような教育に治療法がないと考えているのではなく、むしろ、どのような条件をみれば、我々は

理性を腐敗から防ぎ、その本来の公正さを保たせることができるかということを探究したのである。

(中略)

3) 目標

ルソーにおいて、「人生のよいこと悪いことにもっともよく耐えられる者こそ、もっともよく教育された者」(E. p. 31)なのであるが、これはどういう意味なのであろうか。

「人生のよいこと悪いこと」とは、自然の必然、つまりは、社会のことであると私は思うのである。なぜならば、ルソー自身、次のように述べているからである。「理性の時期とともに社会の束縛がはじまる。」(E. p. 122) また、「自然がわたしたちにあたえていない束縛を、せめて生涯のある時期にはまぬがれさせてやろうではないか。」(同前)

従って、「人生のよいこと悪いことにもっともよく耐えられる者」とは、理性にもっともよく耐えられる者、即ち、社会における自然の必然にもっともよく耐えられる者を意味すると言えるのである。

そして、そのような人間として、「社会に生きる自然人」(E. p. 369)を、仮定して、彼の抽象的教育における目標となるのである。ルソーにおいて、「自然人は、自分がすべてである。」(E. p. 27)ので、「社会に生きる自然人」とは、社会において、如何なる必然にも耐え、自己の存在を内にとどめることのできる人間を意味することができるのではないかと私は思う。

また、このような「社会に生きる自然人」とは、現実には存在しえない抽象的人間なのである。そして、それは「架空の生徒」の中に求められ、その成長の過程が、「子供の発達と人間の心の歩み」にかなったものであるような教育のあり方が探究されていくのである。

(中略)

V. 理性と感情についての考察

- 1) 自己愛 (略)
- 2) ルソーにおける人間観 (略)
- 3) 良心と理性 (感情と理性)

「わたしたちに善を好ませ悪を憎ませる良心は、理性から独立したものであるが、理性なしには発達しえない。」(E. p. 81) とルソーが述べる時、果して、良心が理性に支えられていると考えているのであろうか。

「理性が光をあたえなければ、善もけっして善とはならないからだ。」(E. p. 134)、あるいは、「理性の時期が来るまでは、道徳的存在とか、社会関係とかいふ観念はけっして持つことができない。」(E. p. 123) と述べる時、

これらの意味は、理性が善悪という観念を我々に知らしめるということである。決して、理性が善を導くつまり、理性が良心（感情）を導くという意味ではないのである。

一方、良心の働きは次のとおりである。人間の原初的な感情である自己愛には二面性があった。人間を悪い行為へ導くものと正しい行為へ導くものである。人間が正しく、有徳であるために、後者を前者より優先させるのが良心である。つまり、ドラテもいのように、良心とは、「人間をその精神的本性に結びつけ、物質的事柄についての考慮を越えたところへ人間を高める感情なのである。」

従って、ルソーにおいて、理性と良心は全く独立したものであることがわかるのである。そして、それらはお互いに補い合っていることもわかるが、決して、理性が良心を支えているのではない。人間を有徳へ導くのは、善い行為を感じる感受性である。すなわち、理性は、感情に支えられて、良心へ、そして有徳へと人を導くのであるから、感情なくして人は、有徳になりえないのではないのだろうか。

(以下略)

——— 参考文献 ———

- ①ルソー著「エミール」 (岩波文庫)
- ②三輪正著「議論と価値」 (法律文化社)
- ③R. ドラテ著「ルソーの合理主義」 (木鐸社)
- ④吉沢他共著「ルソー・エミール入門」 (有斐閣)
- ⑤スタロバンスキー著「透明と障害」 (みすず書房)

環境問題と経済学

——学際的研究への模索——

甲南大学 経済学部 経済学科 四回生 大野 幸彦

もとより環境問題は、経済現象としてのみとらえられるものではなく、生態学的、政治的、倫理的等、様々な側面を持つ。従って、現代は、今までになく学際的な研究が必要とされてきている。そして、一步進んで考えると、そういった専門分野をそれぞれの専門家に任せるのではなく、たとえば経済学者にも、生態学的等の視点を持つことが、要請される時代になっている。また社会通念といったような、社会心理学的ともいえる事柄にも関わってくる。そういった、グローバルな視点が必要となってきたわけだが、ここではまず環境問題の経済学的な側面を見てみようと思う。

周知のように、経済の高度成長期に、日本は、驚異的な経済復興を成し遂げたが、それはまさに、経済的効率を最優先した賜物であった。「しかし、日本経済の量的な成長・繁栄が、どのような利益をもたらしたにせよ、それは環境破壊という高い社会的費用の犠牲を払って達成されたものであり、その犠牲が広く社会に転嫁され、とくに低所得者層や次の世代に重い負担となる事実は消すことができません。」これは K.W.カップが、その著書の中で“日本の読者へ”と題した小文の一節である。このように、環境破壊は、経済学においては、社会的費用として認識される。

たとえば水質汚濁を例にとり、この概念を説明すると、こうである。ある河川の上流に工場があり、廃水を流出している。そして下流の住民なり漁民が、その水を直接あるいは、間接に利用している場合、浄化されずに流出されている工場廃水は、彼らに有形無形の損害を与える。この社会に転嫁された損失を、社会的費用 (social cost) というのである。

もし仮に、社会が一つの主体から成り立っており、公害を防止しようとするなら、この社会的費用を極小にしようとする力が働くであろう。しかし、社会の経済的単位——企業が利潤原則によって動く限り社会的費用は考慮されない。なぜなら、利潤原則は市場機構を基礎とするものであり、外部負経済を起している社会的費用に、市場は存在しないからである。ここに市場の欠落 (market failure: 通常は「市場の失敗」と訳されている) が生じている。

こうした市場の欠落は、社会的費用のアンバランスから、産業構造をいびつなものにする。もし、企業の経済活動の基準が、私的費用におかれるのではなく、社会的に見た総生産費におかれるのであれば、市場の欠落を回復することができるであろう。それには、社会的費用をその発生者である企業に支払わせるようにしなければならない。

一九六五年のはじめ、国民生活審議会で、会長の大原総一郎が「公害発生者自己負担主義（PPP原則）」を提唱したのは、そうした考え方によっている。

高度経済成長の中を経てきた国民の意識や社会通念は、一九七三年のオイルショック以来、ある地域では緩やかに、そしてある地域では急激に変ぼうしてきた。急激な変ぼうをとげたのは、大都市地域や、直接公害の被害をうけた——社会的費用を支払わされた——地域である。社会通念は、現在では幾んど PPP原則を受け容れ、推進する土壌をすでに育てている。

そこで問題となるのは、社会的費用を発生者にいかにして支払わせるかという政策の設定である。方法論として代表的なものが、税金と補助金であり、現在とられているこれらにも、問題点は多いが、今最も早急に改善を考えなければならないのが、濃度規制である。

公害の規制措置として、常識的に適用されてきたのだが、累積、濃縮効果を持つ、現代的公害には、濃度規制ではなく、有害物質の全体量を規制の対象にしなければならない。現在のままの濃度規制を続ける限り、利潤原則によって計画する企業は有害物質を出さなくする設備投資と、単に水で薄めて排出する手段にかかるコストを天びんにかけ、とりわけ水の安い日本では、後者が選択されるのである。単純に汚染に税金を課すなどして、その経済的效果を待つまえに、科学的——生態学的な研究、考察を必要とする。

また、このことは、社会的費用論のもつ一つの弱点とも言える。汚染という、経済的な尺度のみではとらえ切れぬ、またとらえ切ってはならないものを、いかにして既存の経済機構の中で取扱っていくかが、今後の大きな課題であろう。

ここまで見てきた諸概念は、環境問題を経済問題としてとらえるための基本的なものであり、とりわけ現代的公害を扱うにはまだまだ多様な操作が必要である。そして、ここでは言及しなかった「人口」「資源」「農業」等の環境問題について論じる場合について考えると、生態学等の助けを借りた、真に学際的な活動が不可欠だと言わざるを得ない。

また、経済学的に政策を考えていく上でも、社会通念の与える影響は PPP原則に見られるように大きなものであり、いわゆる倫理的な問題も絡んでくるだろう。問題をモラリズムから論じる場合、それは社会的な力とはなりにくい。しかし、何よりも恐ろしいのは全てを合理的な理論操作に委ね、モラルを忘れてしまうことである。

中村雄二郎は言う。「物質的な富が、飢えや窮乏を一般的には解消した社会においても、正当なバランスを欠いてアンバランスに増大すればするほど、いっそう感性の惰性化が——とくに商業主義においては顕著にみられるように——おしすすめられることになるだろう。」

経済的効率を追求し、環境を破壊してきたことへの反省は、近年高まるべくして高まってきたが、それは社会を構成する人々の理念として高まってきた。そして、価値（経済学における）を欲求する動物としての人間の感性は、このように惰性化から免れ得ないものかも知れない。しかし、最大の問題は、感性の惰性化そのものではなく、むしろ感性の惰性化に対する無自覚にあると思うのである。

——参考文献——

- K.W.カップ「環境破壊と社会的費用」（岩波書店）
- 伊東光晴「現代経済を考える」（岩波新書）
- マシュー・エデル「環境の経済学」（東洋経済新報社）
- 中村雄二郎「感性の覚醒」（岩波書店）

1. 講義および演習

- ①哲学（哲学とは何か、西洋哲学史概観、現代的諸問題）
- ②哲学特論I（アダム・スミスの社会哲学をめぐる思想家たち）
- ③演習I,II（情念論研究：文献 ルソー「エミール」
三輪正「議論と価値」）
- ④特殊研究（卒業論文指導）

2. 研究発表

- ①谷口文章：「功績・罪過の感覚」の原理について
——アダム・スミス「道徳感情論」の研究——
（イギリス哲学研究第7号/984年）
- ②卒業論文
池上与志人：「純粹経験」の概念について
——西田幾多郎「善の研究」を中心に——
川崎幸千代：理性と感情について
——ルソー「エミール」をめぐって——
- ③ゼミナール論文
大野幸彦：環境問題と経済学
——学際的研究への模索——

3. ゼミナール合宿

- ①第八回ゼミ合宿（昭和59年3月23日～25日、於：IUSK）
研究発表会（1）哲学系・・・ルソー「エミール（第一編）」
（2）心理学系・・・フランクフル「夜と霧」
（3）教養系・・・犬養道子「人間の大地」
中村悟郎「母は枯葉剤を浴びた」
- ②第九回ゼミ合宿（昭和59年8月3日～6日、於：愛媛県伊予市福岡正信氏農園）
ゼミナール研修旅行として、自然農法家・福岡正信氏および評論家・
柳大蔵氏、そして松山市民会議の人々と合同討論会をもつ。
- ③第十回ゼミ合宿（昭和60年3月8日～10日、於：IUSK）予定
研究発表会およびエンカウンター・グループ（第2回）実習
※IUSK＝関西地区大学セミナーハウス

4. ゼミ構成員

- 四回生：池上与志人（文 4），川崎幸千代（文 4），大野幸彦（経 4），
押柄貞子（経 4），北村真（法 4）
- 三回生：大野康（文 3），小竹代里子（文 3），村松伊津子（文 3），
吉内信子（文 3），高井賢一（経 3），菅原宏樹（経 3）
黒川禎三（経 3）
- 受講生：桜井智晴（経 3），菅野 弘（経 3），植木通博（理 3），
和田浩一（理 2），岡保利佳子（理 2），迎真弓（理 2），
脇田博代（理 2），井上友雄（理 1），岩田哲郎（理 1），
滝谷忠則（理 1），岡千秋（理 1），大島利枝（理 1），
大向順子（理 1），川上義雄（理 1），小谷英子（理 1），
馬道佳代（理 1），藤田清士（理 1），前田幸俊（理 1），
万井敏寛（理 1）

※本年度の研究室活動にあたってゼミ幹事の高井賢一，菅原宏樹の両君そして、ゼミ合宿の運営において黒川禎三，和田浩一，脇田博代，迎真弓の諸君の活躍に感謝します。

編集後記

今回の報告書も多くの人達の手をお借りして、ここにやっと完成することができました。

お気づきのように、この報告書から、今までの体裁を一新し、谷口研究室の年間活動報告書となりました。従って恒例の年二回のゼミ合宿（今年度は第八回と第九回）の報告や、卒論、ゼミ論の要旨と、まさに年間の活動のほとんどすべてがここに集約されたこととなります。

しかし、そのため前号より頁数も大幅に増え、活字印刷に至るまで多くの時間を要し、編集者一同本当にやせる思いでした。（とって私個人としては体重の変化なし。現在 95 Kg、至って健康。）そして、量の増大に伴い内容も充実したものが出来上がったように思います。どうぞゆっくり味わって、読んで頂ければと思います。

そして、この報告書の作成にあたり、多くの協力者を得ました。特に忙しい中を駆けつけて下さった他大学の入達、藤松 昭（奈良高専 OB）、佐保田 圭吾（立命館大）、飛田 有司（同）、津本 学（京府医大）、小泉 さより（竜谷大）の諸兄に感謝いたします。また最後になりますが、今回も谷口先生には実に様々な面にわたって御指導いただきました。改めて深く感謝いたします。

昭和六十年三月一日

編集代表 高井 賢一

昭和 59 年度活動報告書

編集者 川崎・大野・小竹・村松・高井・黒川・菅原
桜井・菅野・関戸・岡保・脇田・和田・前田
藤田・川上・馬道・滝谷・岩田・北村

発行所 甲南大学谷口研究室

☎ 078 - (431) - 4341

発行日 昭和 60 年 3 月 8 日 初版発行

印刷所 甲南大学コピーセンター

